

キン肉マンⅡ世～完璧超人始祖編～

やきたまご

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まさかのⅡ世の世界に完璧超人無量大数軍が現れた!?

時間超人打倒を果たし、主戦力超人が療養中の中、武道(ザ・マン)をはじめとした完璧超人達の襲撃!!

次々と無慈悲に倒されていく正義超人達!!

そんな中、立ち上がったのはガゼルマン&チェック・メイト!!

更に援軍に駆け付けたのはノーリスペクト三人衆!?

そしてヒカルドにネプチューンマン!?

二世の世界に完璧超人来たら、誰も倒せないんじゃないか?と思ったので試しにかいてみました。

気が向いたらひっそりと話を書いてUPします。

新世代超人達の参戦表明がはぶられていますがいつかちゃんと描く予定です。

20・02・04に「新たな参戦者達!!の巻」を投稿しました。

23・08・11

ひっそりと新しい話を投稿。続きは期待せずに各々想像してください!

23・08・12

セイウチンVSポラマンの試合を完結させました。

皮肉にも現実世界が決着にアイディアを与えてくれました。

さて、次のジャックチーとハンゾウの試合展開については、思いつかないので続きは期待しないでください……。

目次

壊された平和!!の巻	1
正義の馬鹿コンビ!!の巻	7
一番男のプライド!!の巻	13
悪魔の美学!!の巻	19
凶悪なる助っ人達!!の巻	25
豚男への挑戦状!!の巻	31
学ばれた関節技!!の巻	38
老害の激励!!の巻	43
苦渋の悪行!!の巻	48
復活の殺し屋!!の巻	55
魂の対話!!の巻	62
新たなる参戦者達!!の巻	67
神のお告げに導かれて!!の巻	72
プロット案	76
奪われた伝家の宝刀!!の巻	79
米英同盟の証!!の巻	84
北極野生獣達の激突!!の巻	89
真の覚醒の巻!!	95

壊された平和!!の巻

打倒時間超人のために、過去へ旅立った万太郎達が現代に戻ってきた。しかしダメージの残っている超人が多く、万太郎、ケビンマスクをはじめとした新世代超人達はダメージ回復のため、すぐさまメデイカルサスペンションカプセルに入る事となった。

万太郎達が帰ってきてから数日後、東京ドームにて、過去に旅立った超人達に対して表彰式が行われた。しかし、当日その場に來れる超人はチエックメイト、バリアフリーマン、イリユーヒンのみであった。これでは流石に寂しいと考慮したイケメン・マッスルが、世界各地から正義超人達を集め、大々的な表彰式にした。

表彰台にてチエックメイトがイケメンマッスルから表彰状を渡された。

「あなた方新世代超人ニュージエネレーションの活躍により、過去の歴史を正常なものに戻し、またケビンマスクの消滅を防ぎ、現在の世界の平和は守られました。大変な功績であった事を認め、これを表彰致します!!」

会場からは大きな拍手と歓声が贈られた。

しかし、チエックメイトは内心、活躍できなかった自分が貰うのはふさわしくないと思いながら、賞状を受け取った。

ドガアーン

突如、東京ドームの屋根が爆破したかのような大きな穴が開いた。

「な、何事じゃ!? 警備兵よ、すぐに原因を調べるのじゃ!!」

会場内の貴賓席にいたハラボテマッスルが部下達に命令を下した。

「グロロロ〜、その必要は無いぞ〜!!」

突如、東京ドーム上方から大きな声が聞こえてきた。会場の皆が東京ドーム上方を見ると、何人かの人影が下に降りてくる姿が見えた。徐々にそのシルエツトが大きくなり、見慣れない超人達の姿を確認する事が出来た。その中で約一名、ハラボテやミートが見覚えのある超人がいた。

「あ、あいつはまさか!?!」

超人達の集団の中に剣道の武道着をまとった巨体の男がいた。そ

う、ビッグ・ザ・武道であった。
ズシン

空から降りてきた謎の超人一味集団は、着地し、個性的な口癖を出す。

グロロロ ホギャホギャ ウオンウオン バルルン ギガギガ
ピョクピョ ボシユボシユ

「あ、あなた方は一体何者なんですか!？」

イケメンマツスルが彼らを問いただす。

「我らは無量ラージナンバース大数軍。今一度、完璧超人がいかに完璧超人であるかを知らしめるためにやってきた!!」

「お前ら、さてはdmpの生き残りか?」

イリユーヒンが彼らに対し、冷静な態度を崩さず話した。

バシン

ビッグ・ザ・武道がイリユーヒンに竹刀を強く振るい、イリユーヒンの体が吹っ飛んだ。

「うぐぐ……」

幸い軽めのダメージでイリユーヒンはすぐに立ち上がった。

「グロロロくく、失礼な奴だ。エセ完璧超人と我々を一緒にするとはなくく。そもそも、dmp崩壊の理由はなくく、我々が自らを完璧超人と名乗る愚かな偽者共を粛正したからなのだ!!」

「なんだって——っ!？」

会場にいた超人達が驚いた。

「ば、馬鹿な!?! 確かdmp内の悪魔超人達の反乱により、残虐超人や完璧超人も全て含めて全滅したはずだぞ!!」

チエックメイトがビッグ・ザ・武道に突っ込みをいれた。

「我々は無闇に表舞台に顔を出すわけにはいかん立場だからな。だから暗躍して、我々が完璧超人を粛正し、他の秩序を乱す愚かな下等超人達にも口止めとして、抹殺したのだ! もっとも全員倒したと思っただが、チエックメイト、お前のように一部生き残った者もおる。それはまあいい。今回私がこの場に來たのは大きな理由がある!!」

「ビッグ・ザ・武道、いや、ネプチューンキングよ! 今更になつてな

「ぜお前が!？」

ハラボテマツスルがビッグ・ザ・武道のそばにやってきた。

「私はお前の知っているネプチューンキングではない。そもそも、あいつが完璧超人の首領などとおおぼらをふきおったが、あいつは完璧超人の中でも下の下の男だ! とりあえず私の事はストロング・ザ・武道と呼ぶがいい! さて、ここに来た理由についてだが、まず、かつて完璧超人のエースであった男、ネプチューンマンが過去で醜態を晒したためだ!!」

「ネプチューンマン!？」

「そう、かつては私も一目置いていた超人であったが、ある日を境に完璧超人の世界から出て行ってしまった。奴は下野して自ら下等超人となる事を望んだのだ!。そして挙げ句の果てに完璧超人界の復興と言い、過去の世界で酷い醜態をさらし、完璧超人の威厳をどん底にたたき落とした!!」

ストロング・ザ・武道の目が血走り、怒りを露わにする。

「あいつの姿はいまだに行方知れずだが、見つけ次第ただちに粛正するつもりだ!!」

「ちよつと待って下さい!。それは完璧超人達内の問題であり、我々正義超人には関係ないのでは!」

ストロング・ザ・武道に対し、イケメンマツスルが怖じ気づく事無く自分の意見を言った。

「関係あるのだ!!」

武道の怒りのこもった大きく重く威厳のある声に、会場の皆が驚く。

「私達がここに来たもう一つの理由、それは歴史を塗り替えるという愚行をしでかした、新世代超人共を粛正するためだ!!。超人界を監視する立場の者として、そのような越権行為!。黙って見ておられんだ!!」

その言葉にミートくんが違和感を感じた。

「監視する、一体どういうことだ?」

「ちよつと待て!。俺達が未来を守るためにやってきた行いを否定す

るというのか!! いかにお前が完璧超人のお偉いさんとはいえ許せんぞー!」

イリユーヒンが武道達に対して怒りを露わにする。

「あの時間超人達は本来はロビンマスクとケビンマスクのみを消す予定だった。もしそれ以上何かしでかすようであれば、私達が直々に粛清しに行く予定だった。世界の調和のためにな」

「消す予定? ということはお前は時間超人達の行いを知っていないながらもケビンマスク、ロビンマスクの消滅を見過ごそうとしていたのか!!」

「貴様ら下等超人1から10まで説明する必要は無い! そういえば貴様も過去に旅立った超人の一人だったな、ならば粛清対象!! やれ、マックス・ラジアル!」

「バルンバルン!」

両肩に巨大なタイヤを装備したマックス・ラジアルという名前の超人が巨大タイヤを回転させて、イリユーヒンに勢いよく突進した。

ドゴオ

「ぐわあ!」

イリユーヒンの体が軽々と上方に吹っ飛んだ。マックス・ラジアルはイリユーヒンを右肩を使ってカナディアンバックブリーカーの体勢にとり、右肩のタイヤを勢いよく回した。

ガガガガガガ

「ウギヤ——ッ!!」

イリユーヒンの背中が大きく削られ、機械部品が破損しあちこちにちらばる。やがて、イリユーヒンが動けなくなった。

がしやん

マックス・ラジアルは乱暴にイリユーヒンの体を床におろした。

「イリユーヒ——ンッ!! おのれ——っ!!」

バリアフリーマンが怒りの感情を露わにして、勢いよく完璧超人達に向かった。

「ギガギガ、今度はこのクラッシュユマンが下等超人を血祭りにあげてやろう」

クラツシユマンがバリアフリーマンの前に立ちふさがる。

「な、なんじやお前は!!」

「くらうがいい、アイアングローブ!!」

グワアシヤア

クラツシユマンの身体の装備が肉食動物の口のようにひらき、バリアフリーマンをかみ砕くようにつぶした。

「ぐわあ——っ!!」

「どうれ、血まみれの姿を拝見するか〜」

「ホ、ホヘラア〜……」

ばたん

クラツシユマンがバリアフリーマンを解放すると、バリアフリーマンの体に無数の刺し傷ができ、そして大量出血し、意識を失って気絶した。

この惨状に一人の超人が立ち上がった。

「チャト——ッ!」

どこからか、武道に跳び蹴りをかます男がいた。その男はチヂミマンであった。

バシ

武道は右手でチヂミマンの蹴りを簡単に受け止めた。

「グロロロ、不意打ちとは下等超人らしい愚行だ。不意打ちとはいえ、貴様のような下等超人の一撃をくらうわけにはいかぬ!」

ドゴオオ

「チャガア!!」

チヂミマンの顔面に強烈なパンチが放たれた。チヂミマンの顔面は拳の形に大きく変形し、歯も何本か抜け、そのまま床に倒れた。

「グロロロ〜、もうみておられん!! 許せん!!」

巨体を揺らして、デストラクションがストロング・ザ・武道に向かった。

グワシイ

ストロング・ザ・武道はデストラクションと組み合い、審判のロツクアップ状態に持ち込んだ。

「グロロロ〜分かるぞ〜お前も口だけの下等超人ということがな」
「ぐっ！」

デストラクションははじめこそ互角に組み合っていたが、徐々にストラング・ザ・武道に力負けして押されていく。

「しかしお前は運が良い。私に似た口癖、そして私の仲間になつたやつがおる。だから、痛い目には合わせないでやるぞ」

ババババババ

「グロラア〜！！」

組み合う両者の周りに、エネルギーの動きが見えた。やがて、デストラクションから角が消え、容姿も体も普通の人間と変わらないものとなった。

『あ——つと！ これは酷い惨状です!! 実力派の正義超人達がなすすべ無く蹂躪されていきます!! 果たして完璧超人達の暴走を止められる超人はいるのでしょうか——つ!!』

「どうだ？ まだ我々に立ち向かうやつはおるか？」

会場の超人達は怯えている。超人界では決して弱くない四人の超人が瞬時に倒されてしまったからだ。しかし、一人勇気を持って立ち上がる者がいた。

「おい……てめえが完璧超人としての威厳を取り戻したいっていうんだつたらな！ 俺も自身の威厳のために、立ち上がろうじゃねえか!!」

シユタン

何者かが素早く飛び出し、武道に向かった。そして、武道の顔面に鋭い飛び膝蹴りをヒットさせた。

ゴガアアン

「グロロロ〜！」

なんと、武道に飛び膝蹴りを放ったのはガゼルマンであった。

正義の馬鹿コンビ!!の巻

ガゼルマンの強烈な飛び膝蹴りがストロング・ザ・武道に炸裂、ダメージでぐらつき片膝をついた。

「ガ、ガゼルマン!! なんてことを!?!」

ミートくんが思った事を口にした。他の正義超人達も同様のことを思っていた。

「グロロ〜! ゆ、油断したとはいえ強烈な一撃であつた!」

「どうだ! これがヘラクレスフアクトリー主席卒業のガゼルマン様の実力だ——っ!!」

ぐらついていた武道が体勢を立て直した。

「グロロ〜、お前のやった無謀に近い行為、我々に対する宣戦布告とみなして良いのだな?」

ガゼルマンのもとにイケメンマッスルが近寄り、この場を丸く収めるようにアドバイスした。しかし、

「やってやろうじゃねえか! 例え俺一人でもお前らの相手をしてやるってんだ!!」

このガゼルマンの漢気に多くの超人が無謀だと感じた。しかし中にはその漢気に感銘を受けた者もいた。

「ガゼルマン! あなただけに良い格好はさせませんよ!」

チエックメイトがガゼルマンのもとにかけよってきた。

「チエックメイト! 一緒に戦ってくれるというのか!」

「はい、あなた同様に私も威厳のためです。私は万太郎達と一緒に、過去の世界に旅立ちましたが、闘う事すら出来ませんでした。それに、超人オリンピックの時も、悪魔種子との闘いでも思うような活躍ができませんでした。一超人の誇りにかけて、今回は満足のいく結果を出したいのです!」

完璧超人の一人、ダルメシマンが笑っている。

「ウオンウオン、むぎむぎ死に行くこともなかろうに。馬と鹿のコンビなだけに馬鹿コンビってところだな!」

ハツハツハツハ♪

完璧超人達がダルメシマンのしやれに笑っていた。

「ちよつと待って下さい！ ガゼルマンはともかく私は馬鹿ではありません!!」

「くおらあ！ チエツクメイト！ ガゼルマンはともかくとはなんだあ！」

チエツクメイトとガゼルマンが喧嘩しそうになり、慌ててイケメンマッスルが仲裁に入る。

これ以降、他に正義超人が続く様子もなく、正義超人二人による対完璧超人同盟が結ばれた。

「グロロロ〜、無謀に近い勇氣をもっているのはお前ら二人だけか？ いったておくが二人とはいえ我々は容赦しない！ お前達全員が負けたときは正義超人の全面降伏を認めるんだぞ!!」

ガゼルマンとチエツクメイトが冷や汗をたらし、緊張の面持ちで見える。

そして、この様子を超人委員会も黙ってみているわけがない。イケメンマッスルがアナウンスをした。

「完璧超人の諸君！ 後日、同場所にて正義超人と完璧超人との対抗戦を行えるように段取りをしておく！」

そして、ハラボテにも動きがあった。

「万太郎やケビンマスクといった主力超人はメデイカルサスペンションカプセルにまだ入っておる。あの二人だけでは心細い。やむを得ん、あいつらを援軍として呼ぼう」

ハラボテの指示を聞いた超人委員会のスタッフが驚くが、すぐに仕事にとりかかる。

「こりゃあえらい助っ人だぞ……」

翌日、東京ドームにて正義超人と完璧超人のにらみ合いで試合が今にもはじまりそうな雰囲気である。

そんな中、武道がでてきた。

「お前達は少ない人数で我々と戦う事を決意した。その勇氣を称える。だから対戦相手を選ばせてやろう！」

そう言つて武道はカードをガゼルマンの前に差し出した。

「このカードには我々の異名が書かれている。引き当てた異名のカードがお前達の対戦相手となる」

「え？ 選ばせるといってもカードで選ぶなら、ランダムで全く意味がないんじゃないか？」

ギロリ

ガゼルマンが常識的なツツコミを入れるとストロング・ザ・武道は血走った目で睨み付けた。

「何か言つたか？」

「い、いえ！ なんでも!!」

ガゼルマンが慌ててカードを引き、カードを観衆に見せた。

「完牙だ！」

その言葉を聞いて、ダルメシアンのような見た目の超人が出てきた「ウォンウォン、俺だ、ダルメシマン様だ。貴様が俺の牙の餌食になる奴か！ ガゼルは食った事がないから楽しみだぜ〜〜！」

「へっ、お前には俺の噛ませ犬になつてもらうぜ!!」

「貴様、俺を噛ませ犬と言つたこと、後悔させてやるぜ!!」

ダルメシマンが犬特有の牙を見せた威嚇を見せた。

次にチエックメイトがカードを引く。

「完掌です！」

その声に、バリアフリーマンを倒した男が出てきた。

「ギガギガ、クラッシュユマンだ。私の対戦相手は元dmpの超人か。そこの鹿よりは手応えがありそうだな」

「くっ、なんで俺だけこんな扱いなんだ……」

チエックメイトはなにかおもうところを見せる様子だった。

「この闘い、あの人も見ていてくれるだろうか……」

チエック・メイトの頭には、自分を育て上げたサンシャインの姿があった。

ガゼルマンとチエックメイトの対戦相手が決まったところで、武道が竹刀を振りかざし、7つの穴を出現させた。7つの穴にはそれぞれ、「完武」、「完牙」、「完裂」、「完恐」、「完遂」、「完掌」、「完刺」の文

字が描かれていた。

「では、我々はこの穴の先で待っているぞ！」

武道がそう言うのと、それぞれの穴に各超人が入り、先に戦地へと向かっていった。

「チエックメイト！　生きて帰ってこようぜ！」

「はい!!」

ガゼルマンとチエックメイトはすぐに自分の対戦相手が待つ穴へと向かった。

場所変わり、キン肉星刑務所^{プリズン}にて、三人の超人が野に放たれた。三人の姿には影が入り、外観が確認しづらい。

「グロロロ、久々に娑婆の空気が吸えそうだな〜!!」

「ト〜トトト、今度の対戦相手も魚じゃあなかろうな〜!!」

「ムヒョヒョ、勝てば刑期の短縮か。報酬としては悪くないぜ〜!!」

三人の超人は手足に重し・手錠をつけた状態で地球へと向かった。

ガゼルマン、チエックメイトが穴に入り、やがて、見知らぬ風景とリングのある場所にたどり着いた。リングには完璧超人が待ち構えている。もちろん、超人委員会も準備が良く、東京ドームのモニターに完璧超人の用意した7つのリングが映し出された。

最初にチエック・メイトがクラッシュユマンの待つリングへと到着した。クラッシュユマンの目配せを見て、会場スタッフがゴングをならした。

カーン

『チエックメイトVSクラッシュユマンの試合が始まりました!!
チエックメイト、ガゼルマン！　どちらも負けてしまえば正義超人の降伏が決まってしまう！　チエックメイトにとっては絶対に負けられない闘いとなります!!』

「見えますか、バリアフリーマン！　イリユーヒン！　あなたがたの仇は私が討ちます!!」

「ギガギガ、我が完掌に貴様を納めてやろう！」

クラツシユマンが突撃し、自身のアイアングローブで、チエツク・メイトを攻撃する。

「ギガア!!」

ガンゴオン

チエツク・メイトにまともに攻撃が当たったが、クラツシユマンが違和感を感じた。

「ギ、ギガガ〜!?!」

チエツク・メイトは咄嗟にレンガボディに体を変えていた。そのため、攻撃をまともにくらったが、ノーダメージに近い状態だった。

「どうやら、あなたと私は相性最悪のようですね！」

ドガア

「ギガア！」

チエツク・メイトは掌底を突き上げ、クラツシユマンの顎にヒットさせた。

ガゼルマンもダルメシマンのリングに到着した。

「おい、ゴングをならせー！」

ダルメシマンの指示ですぐにゴングがならされた。

カーン

『ガゼルマンVSダルメシマンが始まりました！ 会場の皆さんはガゼルマンに全く期待していないでしょう！ ガゼルマンはどこまで持ちこたえる事が出来るでしょうか!!』

「ウオンウオン！ 実況に舐められる超人とは、傑作だぜ!!」

『ダルメシマン速攻！ 早くもガゼルマンに噛みつきこうと襲いかかる！』

ドガア

「ヴォ〜〜!!」

ダルメシマンが噛むタイミングに合わせ、ガゼルマンの拳がダルメシマンの口内にめりこむようにヒットした。

『なんと！ ガゼルマン、ダルメシマンの噛みつき攻撃を避けるどこ

るか、逆にダルメシマン一番の武器に対し、強烈な右ストレートをお見舞いした!』

「バッファローマン先生の教えが役に立ったぜ! 弱点を目立たなくするために美点として際立たせているってな! お前の最大の武器である牙攻撃こそ、一番スキを見せる攻撃だ!!」

ガキイ

ガゼルマンがダルメシマンを首相撲の体勢にとらえた。

「人様にいきなり噛みつくしつけの悪い犬には、この俺が直々にしつけをしてやるぜ!」

ガギン ガガン ゴガア ドゴオ

ガゼルマンがムエタイ式の膝蹴り（チャランボ）を連打する。

「悪い子だ! 悪い子だ! 悪い子だ!」

『ガゼルマン! ムエタイ式の強烈な膝蹴りの連打をお見舞いだ——っ!!』

ガゼルマンの猛攻に、早くもダルメシマンが流血を見せる。ガゼルマンの思わぬ優勢に観客が大いに盛り上がった。

一番男のプライド!!の巻

次々と決まるガゼルマンの膝蹴りに、ダルメシマンの顔から余裕の表情が消えた。

「調子に乗るなよ、下等超人!!」

がぶう

「ぐおああ!!」

『ダルメシマン！ ガゼルマンの右肩にくらいついた——っ!!』

ガゼルマンは苦痛に顔をゆがめる。

「ウォンウォン！ ガゼルの肉は初めてだが乙な味だぜくく!!」

がぶう がぶう

ダルメシマンさらに噛み付いて、ガゼルマンの肩の肉を味わっている。

がしっ

「ヘラクレスファクトリーでな、こういう時にどうすればいいかも教わっていたんだぜ!!」

冷や汗をかきながら、ガゼルマンは両腕でダルメシマンの身体を掴んだ。

『ガゼルマン！ 自身の右肩をダルメシマンに噛ませたまま、ダルメシマンを後方に投げた!』

ガゴオ グワシイ

「ギャオン！」

ダルメシマンは頭から叩き付けられ、同時にガゼルマンの右肩も一部もげた。

「敵に許しを請うくらいなら肩の肉くれてやれっとな!!」

ガゼルマンはヘラクレスファクトリーでラーメンマンに教わった事を実践したのだ。

ダルメシマンにダメージを与えたものの、ガゼルマンの右肩もえぐれて、出血が激しい。

「ウォンウォン！ 良い血の匂いだ！ 野生の血が吠える！ ドギー
ネイルキック!!」

『ダルメシマン！ ガゼルマンに鋭い爪の生えた足で右のハイキックだ!!』

さっ

ガゼルマンは上半身の力を抜くようにして頭を下げて、ドギーネイルキックを軽くかわした。

『ガゼルマン！ キックボクシング技術のバックスウエーで攻撃をかわした!!』

「本当の蹴りっていうのはこういう蹴りをいうんだ!!」

バシイイン

「ウォン!!」

ガゼルマンは左のローキックが、ダルメシマンの左脚の膝裏に命中した。

どたあ

ダルメシマンはハイキックの最中に軸足を蹴られたので、バランスを崩し、倒れた。

『ガゼルマン！ お返しに鋭いローキック!! ムエタイ仕込みの凄まじい蹴りです!!』

「どうだ！ 関節の裏は筋肉がつかず、いかなる格闘家でも鍛えづらいくところだ！ さぞかし痛かろうな!!」

「お、おのれくく!!」

「ここらでフィニッシュだ!!」

ガゼルマンがリングのロープにジャンプし、ロープの弾性を利用して高くジャンプし、身体を回転させながらダルメシマンへと向かっていく。

「サバンナヒート——ツ!!」

ガゼルマンは右手に爪形の武器、アントラーフィストを装着した状態で体を回転させた。

『ついにガゼルマンの最大の必殺技が出ました——っ!! 正義超人軍の初の一勝目をあげるのはまさかのガゼルマンか——っ!!』

「ウォンウォン、そうはいくか——っ!!」

もぞもぞ もりもり

ダルメシマンの黒ぶち模様が茶色くなり、やがて身体全体が茶色くなり筋肉質な身体となる。

かきいん

『これは！・ダルメシマンの牙がガゼルマンのサバンナヒートを受け止めた！』

「なに!？」

ガゼルマンは自身の必殺技を防がれショックが隠せない。

「ウオンウオン、俺が変身したのは土佐犬。そもそも土佐犬とは日本の四国犬であった。しかし、その昔完璧超人が完璧超人ならぬ完璧超犬を産み出すために、四国犬に超人レスリング向けの犬種をミックスし生命体を産み出した!! それは闘うためだけに産まれた最強の土佐犬!! つまりおれのことだ——っ!! こんなガラスの爪、痛くもかゆくもないわ!!」

ぴきぴき ぱきいん

ガゼルマンのアントラーフィストが砕けた。

「ああ!! 俺のアントラーフィストが!？」

「思い知るが良い!! 完璧超人と下等超人の差というのをな!!」

ダルメシマンがガゼルマンの頭に噛みつき、両膝をガゼルマンの側頭部にヒットさせた。

「ドッグイヤークラッシュユ!!」

ドゴオン

「ぐほあ!!」

ガゼルマンがダウンした。頭部も肩も噛まれて出血が激しくなり、ガゼルマンも意識がもうろうとしている。

『ガゼルマンダウン! 予想以上に善戦しましたがここまでか!!』

ワッソ ツッ スリッ

「終わったな」

ダルメシマンがガゼルマンに対し背中を見せ、リングを降りようとする。

「ま、まだ、終わっちゃあいないぜ……」

ガゼルマンは朦朧としながらもロープをつかんで、ゆっくりと立ち

上がってきた。

セブ〜ン エイト〜

『ガゼルマン立った！ まだ試合は終わっていない!!』

「お前、まだ闘う気か？ これ以上やってもお前の弱さを思い知る事になり、惨めになるだけだぞ？」

「弱さを思い知る？ 惨めになる？ ハハハハハ!!」

ガゼルマンは突然大笑した。

「どうやらドッグイヤークラッシュで頭をおかしくしたようだな」

ダルメシマンはやれやれと言わんばかりの顔をしている。

「恥ずかしい話、こちらら自分の弱さをよく知っているさ〜。なんせ公式戦におけるめざましい活躍がないに等しいからな。最初こそ皆俺に注目していたが、いつしか誰も俺を戦力とみなさなくなり、色んな奴に内心馬鹿にされて、惨めの中の惨めってポジションになってしまった」

「ウオンウオン、よく自分を見ているが、自虐的すぎて笑えないぜ」

「でもな……いつしか万太郎達が闘えない状況が来たら、仲間のために、そして、俺の失った誇りを取り戻すためにリングに立つと決めたんだ——っ!!」

ガゼルマンの目に闘志が戻ってきた。

「では、このダルメシマン様がお前を英雄として戦死させてやろうではないか——っ!!」

『ダルメシマン！ 再びガゼルマンに襲いかかる!!』

「ここで負けたら、もう俺は永遠に金魚の糞！ 二度と仲間達と肩を並べられる立場にはなれねえんだ——っ!!」

ボワア

ガゼルマンの身体が金色に光った。

「ウオン!? なんだこの発光は!?!」

「これが、ガゼルマン様の実力だ——っ!!」

ビシイ ズウン ガキイン ドゴオ

ガゼルマンはダルメシマンに素早く左ジャブ、右ストレート、左アッパー、右膝りのコンビネーションをくらわした。

「ウオオン!?!」

『すごいぞガゼルマン！ もはや駄目かと思われましたが、起死回生の猛反撃だ!!』

「ば、ばかなー！ さつきとはスピードもパワーも違う!?!」

ダルメシマンはグロッキー状態である。

「今だー！」

がしっ

ガゼルマンはダルメシマンを脚からつかみ、空中へと高くジャンプした。そしてダルメシマンの身体を逆さにしつつ、両腕でダルメシマンの両脚の膝を折りたたむように曲げていく。さらに、自身の太ももとふくらはぎの間にダルメシマンの腕をはさみ、ダルメシマンの頭をたたきつけにいく。技としてはパイルドライバーに近い形の技である。

「初公開！ これがおれの新必殺技！ ワイルドスト——ムツ!!」

ドガアアアン

ガゼルマンの技は見事に決まった。ダルメシマンはマットに頭から勢いよく叩き付けられ、身体もくの字に折れて背骨が折れた。

「ぐはあー！」

ダルメシマンは血反吐を吐き、やがて意識を失い立ち上がれなくなった。

カン カン カン カン

『やりましたガゼルマン！ 奇跡の勝利です!! 完璧超人無量大数軍から一勝目をあげました!』

ガゼルマンの勝利を期待していなかった観客が多く、思わぬ勝利に大いに盛り上がった。

「ガゼルマン！ ガゼルマン！ ガゼルマン！」

「うう……」

ダルメシマンが意識を取り戻した。ダメージが残っており満足に立ち上がれず、四つん這いである。ガゼルマンは四つん這いのダルメシマンに近寄り、右手を差し出した。

「お前のおかげで俺は自分の力を限界以上に引き出せた。だから感謝

の気持ちを示したい」

ガゼルマンの眼は先程まで敵に対する闘争心に満ちたものだったが、今はライバルに対する敬意で満ちている。

ぼし

ダルメシマンがガゼルマンの手を払いのけた。

「負けた完璧超人に情けは無用だ！」

ダルメシマンは、何とか立ち上がる。

ぼきい

ダルメシマンは自分の牙の一本をへし折った。

「お前……かつてはヘラクレスファクトリーで一番だったんだよな……」

ダルメシマンの思わぬ言葉にガゼルマンは驚いた。

「一番に戻る日もそう遠くないかもな……」

ダルメシマンはガゼルマンに向かって、寂しそうな笑みを浮かべた。

「ダルメシマン、お前まさか……」

「これが敗北した完璧超人の最期だ——つ!!」

グサア どぼあ

ダルメシマンは自分がへし折った牙を、自身の心臓にめがけて刺した。心臓にピンポイントで刺さり、胸部から大量の出血が見られる。

「ダルメシマン!？」

「ウォン……」

ガゼルマンがかけよったが、ダルメシマンはすぐに息を引き取った。

「なんだよ……なんだよ——つ!! お前……俺に負けて悔しくねえのかよ……俺だったらめっちゃくちや悔しいぞ——つ!! お前悔しいと思うならよ、今からでも地獄から戻って来い!! ダルメシマ——ン!!」

ガゼルマンの悲痛な叫びが響いた。しかしその声はもうダルメシマンには届かなかった……。

悪魔の美学!!の巻

巨大スクリーンごしに各々の完璧超人がダルメシマンの自害に反応を示した。

「ダルメシマンよ、完璧超人の名に恥じない潔い自害であった」

ストロング・ザ・武道はダルメシマンに敬意を表した。他の完璧超人も同様の行為を行った。

「俺には理解できない！ 負けたら死ぬなんてどう考えたっておかしい！」

巨大スクリーンごしに、ガゼルマンに武道が返答する。

「その考えこそ、下等超人が下等超人たる理由なのだ。完璧超人として敗北する事は死に等しい事実。それ故に、我々は不敗の存在になり得るために、己の実力を日々研鑽してきている!! 貴様ら下等超人のようなひ弱な存在と一緒にするな!!」

「くそつたれが！」

ガゼルマンはすぐに東京ドームへと続く穴へと帰っていった。

「あの武道着野郎！ また俺の膝蹴りをくらわせてやるぜ!!」

一方、チェックメイトの闘うリングにおいて。

「ほう、お前は我々の考えに対し理解があるようだな」

チェックメイトはダルメシマンの自害に対し、反応を変えなかったのだ。

「私は元は悪行超人。生きるか死ぬか、勝利しか許されない世界にいた。かつての師匠サンシャイン首領に悪魔超人とはなんたるかを骨の髄まで教えて貰った。それが私の基本的な力に繋がり、自分でも悪くない考えだと思っている。そしてそれは完璧超人達の考えとも繋がるところがあり、あなた方の考え方にも共感できるのです」

「ギガギガ、下等超人ながら良い思想の持ち主だ。どうだ？ お前も一緒に完璧超人をやらないか？ 俺を苦戦させたら武道の方に直談判してやってもいいぞ」

「断っておくが、今の私は正義超人として闘っている。その誇りを捨

てるというならお断りだ」

「そうか、改めてお前を敵としてお相手させていただけようか!!」

『クラッシュユマン！ チェック・メイトにアイアングローブで再び襲いかかる!!』

「チェス駒^{ピース}チェンジ！」

チェックメイトは右肩のボタンを押す。それと同時に頭と馬^{ナイト}が入れ替わる。

『チェック・メイト！ 馬の形態へと変身した!!』

「くらえー！」

ガゴン

クラッシュユマンはアイアングローブを閉じたが、チェック・メイトに逃げられた。馬^{ナイト}の跳躍力を生かし空に逃げていた。

「ケンタウロスの黒い嘶き————つ!!」

ドドドドドド

「ギガガ!!」

チェック・メイトは四本の馬^{ナイト}の脚をフルに生かし、キックの連打をクラッシュユマンに浴びせた。クラッシュユマンはたまらずダウンした。

『お————つ！ チェック・メイト強い！ クラッシュユマン相手に余裕の試合を見せております!!』

「ギガギガ、下等超人の技を試しに食らってみたがこんなものか」

『クラッシュユマン！ 立ち上がってきた!!』

「もう一度マットに寝かせてあげましょう！ ケンタウロスの黒い嘶き————つ!!」

「ギガギガ、二度も同じ技を食らうか！」

『クラッシュユマン！ 自身のアイアングローブを閉じて防御する!』

ガガガガガガ

チェック・メイトはアイアングローブの上からクラッシュユマンに馬の四本足の蹴りの連打を浴びせる。

「ギガギガ、効かんなく」

「くっ！」

『クラッシュユマンの完璧なる防御にチェック・メイト全くダメージを

与えられない!!』

「お前の攻撃は見切った!」

パカッ

クラツシユマンはアイアングローブを開いた。

ガシイ

クラツシユマンは両手で、チエツク・メイトの二本の脚を捕らえた。

「うっ!」

「ギガギガ、これが完璧超人の力だ!!」

『クラツシユマン! チエツク・メイトの両脚を持って、かんぬきスープレックスだ!!』

ドガア

チエツク・メイトは顔を叩き付けられるように、マットに激突した。

「体勢を立て直さなければ! チェス駒^{ピース}チェンジ!」

チエツク・メイトはフォーマルの王様^{キング}の姿に戻った。

「今度こそおしまいだ! アイアングローブ!!」

『クラツシユマン! またもアイアングローブで襲いかかった!!』

「チェス駒^{ピース}チェンジ!」

チエツク・メイトは煉瓦ボデイへと変身した。

「あなたのその技は通じませんよ!」

グワシヤア

「ギガギガ、先程は手加減してやっていたのだぞ。フルパワーでは相手の身体を粉碎しかねんからな」

バキイ パキイ

アイアングローブをくらったチエツク・メイトの身体から、嫌な音が聞こえてくる。

「ぐおああー!」

チエツク・メイトの悲鳴が聞こえてきた。

「開掌!!」

クラツシユマンのアイアングローブが開き、その中から傷ついたチエツク・メイトの姿が出てきた。

『チエツク・メイト! 煉瓦ボデイがフルパワーのアイアングローブ

に耐えきれず、ところどころ径の大きい穴やひびができていくぞ――

――っ!!』

チエック・メイトはダウンした。

『チエック・メイトダウン！ ダメージは大きいようだ!!』

「ギガギガ、久々に下等超人相手にフルパワーを出してしまった」

ガシッ

チエック・メイトが倒れている状態でクラッシュマンの脚を右手で掴む。

「お前、まだ生きていたのか？ その手を離せ！」

どご どご

クラッシュマンはチエック・メイトを振り払おうと踏みつけにいった。

『クラッシュマン！ 立ち上がろうとするチエック・メイトにストーンピングをくらわせる！ チエック・メイトの凜々しい顔がどんどん血に染まっていく!!』

「その端正な顔を傷つけたくは無かろう！ いさぎよく悪あがきをやめたらどうだ！」

「悪あがき上等です……私を育てたサンシャイン首領から、教わりました。鬨いに美学はいらない。どんなに卑怯な手を使おうと、惨めな醜態を晒そうと、命ある限り戦い続けよ……死す時も前のめり、それが悪魔超人だと！」

「ギガギガ、なんとも泥臭い考えだ。お前は酷い師匠の下で育ったんだなく。だからお前は愛想をつかして、今は正義超人として鬨っている」と

チエック・メイトの表情が変化を見せた。

「クラッシュマン、あなたは言っただけじゃない事を言いました。サンシャイン首領が酷い師匠かどうか、あなたの身をもって思い知らせてあげますよ!!」

ボワア

チエック・メイトの身体が金色に光った。

ガシリ ばああん

『チエック・メイト！ クラツシユマンの両脚を持ち、そのまま自身の肩の上に持ち上げて宙高く跳んだ——っ!!』

「ギガア！ そうはいくか！ レッグ・アイアングローブ!!」

パカア グワシイ

チエック・メイトの両腕に鋼鉄の針が突き刺さるが、チエック・メイトは表情を一切変えない。

『チエック・メイト大丈夫か！ さらに身体に傷がついた!!』

「私はサンシャイン首領の下、痛みを感じないトレーニングを長年してきました！ これぐらいでは私の勢いは止められません!!」

チエック・メイトは空中で城・王様・馬へと変身した。
グラントスラム

「先程は油断してあなたの一撃を受けてしまいました、今度は私の乾坤一擲の一撃を受けてもらいます!! 馬式誉れ落とし——っ!!」

『出ました——っ!! チエック・メイト最大の必殺技だ!! クラツシユマンをマットに沈めることが出来るか——っ!!』

チエック・メイトはクラツシユマンの足に全体重をかけて落下する。

「無駄だ！ 閉じよアイアングローブ!!」

クラツシユマンはアイアングローブを閉じて、防御の態勢をとった。

「私の技を甘く見て貰っては困ります!!」

ガガアアン

『チエック・メイト！ 自身の最大の必殺技でクラツシユマンをマットに叩き付けた——っ!! しかしこれはクラツシユマンに効いたのか——っ?』

「ギガア……ゴフウ!」

パリ パキン

クラツシユマンのアイアングローブにひびがはいる。

パキーン

アイアングローブは全壊し、意識を失った状態のクラツシユマンが出てきた。

カン カン カン カン

『チエック・メイト！ あわやという場面もありましたが、逆転の馬式
誉れ落としを決めて、完璧超人無量大数軍から二勝目をもぎ取った！

——つ！』

大阪にある串カツ屋のTVで、チエック・メイトの試合結果を喜ば
しそうに見るサンシャインの姿があつた。

「よくやったなチエック・メイト」

凶悪なる助っ人達!!の巻

KO負けしたクラッシュユマンが意識を取り戻した。

「ギガ……まさかこの俺が負けるとはな……お前の方がより完璧に近い力を持つていたということか……」

チエックメイトは首を横に振る。

「いえ、私はあなたより力が強いなんて思っはいません。勝敗を分けたのは考え方の違いでしょう」

「考え方の違い……だと?」

「ええ、あなた方完璧超人の信念は私は素晴らしいと思います。一方、その信念に固執しすぎて、他の意見を受け入れる柔軟性がないという欠点もある。ゆえにあなた方は『完璧』という名の限界を作り上げているのです!」

「か、『完璧』という名の限界……」

「そうです。私はサンシャイン首領に『悪魔』の闘い方を徹底的に教わり強く育ちました。しかし、私はデビュー戦で正義超人に負けてしまったのです。完璧なる『悪魔』に育ったのにもかかわらずです。でも、正義超人達に仲間入りして分かりました。私もあなたのように『悪魔』という名の限界の殻に閉じこもっていたんですよ」

「ギガア……なるほど、我々完璧超人自らが作り上げた文化が敗因といたいわけか……」

「私は『悪魔』としての限界を知った後、慈悲の考えつまり正義超人の考えを身につけました。今日私があなたに勝てた理由がそれなのですよ。だからあなたも『完璧』の思想だけでなく『悪魔』の思想、そして『正義』の思想を受け入れれば、もっと強くなります!」

「ギガガガ……もつと強くなれるか……早くその事に気付きたかったもんだ……」

チエック・メイトがクラッシュユマンの心情を察して慌てる。

「クラッシュユマン! ダルメシマンのように自害するなんてやめなさい! 生きて強くなるのです!」

「だめだ……お前やその仲間が師匠の教えを大事にしているように、

俺も完璧超人の師匠とも言えるお方の信念を大事にしている……それに……ダルメシマンのやつも、あの世で一人寂しがっているだろうからな……」

「クラッシユマン……」

ズボオ グシャリ

クラッシユマンが自身の胸に右手を突っ込み、心臓を潰した。

「ギガハア!!」

クラッシユマンは血反吐を流し、すぐに息絶えてしまった。

東京ドームに戻ったガゼルマンもクラッシユマンが自害する前のやり取りを初めから見えていたようだ。

「ガゼルマン見えていますか！ この闘い、私達の誇りを守るだけでない。完璧超人を救うための闘いでもあります！ そのためにも負けるわけにはいきません!!」

巨大スクリーン越しにチエック・メイトが決意を語り、ガゼルマンもその言葉に頷き、眼に闘志の炎を燃やす。

「ようし！ あいつらの首領を倒して、考え方を改めさせてやろうじゃねえか！」

ガゼルマンは完武の穴へと早速向かった。

「ガゼルマン！ てめえは休んでいればいいんだよ！」

どごおん

「ぐわっ！」

『突如、黒装束を纏った三人組がガゼルマンを吹っ飛ばした！ 三人それぞれが「完遂」、「完刺」、「完裂」の穴に入った！』

「ガゼルマン、あなたは傷つきすぎています!! 次の闘いのために身体を休めておくのです!!」

吹っ飛ばされたガゼルマンのもとにジャクリーンがよってきた。

「しかし、あの三人組を見過ごすわけには！」

「心配はありません。あの三人は超人委員会が特別に呼んだ助っ人です」

「助っ人だと、一体誰なんだ？」

マックスラジアルの待つリングに一人の男がリングインした。
ずしいん

「さて、あの馬鹿コンビのどちらかが来たのかな？」

グサア

「ぐおっ!？」

突如、マックスラジアルは背後を刺される攻撃を受けた。

「不意打ちとは、下等超人よ、覚悟はできているんだろうな〜!」

マックスラジアルがふりむいて、リングインした男を見る。

「なっ、お、お前は!？」

マックスラジアルは予想外の超人の姿に驚いた。まさにフォーク車そのものの超人、ノーリスペクトの一人として恐れられたフォーク・ザ・ジャイアントがリングインしていたのだ。

「グロロロ、これはいい! 思い切りやつてもぶっ壊れなさそうな相手だな〜!」

『とんでもないサプライズです! ノーリスペクトの一人フォーク・ザ・ジャイアントが電撃参戦だ——っ!!』

場所かわり、巨大湖の上に特設されたマーリンマンのリングに一人の超人が降り立った。

ぎばあ

「ピョ〜〜〜〜ッ!!」

マーリンマンが水中から、リングインした超人に自身の必殺技であるスパアフィッシングで胸を一突きした。

どすう

「む? この手応えは!？」

マーリンマンが突き刺したのは超人ではなく、丸太であった。

スパア

「ピョガア!!」

マーリンマンの背中を何者が刃物で切りつけた。

「ト〜トトト、完璧超人にしては単純な手にひっかかるやつだな〜っ!」

マーリンマンを切りつけた超人は般若の仮面をかぶった超人、ノーリスペクトの一人ハンゾウであった。

『こちらのリングでもノーリスペクトの一人、ハンゾウが現れた――』

――っ!! 一体これはどうしたことか――っ!!』

ターボメンが待つリングに一人の超人が歩いてくる。

「気配を消してよくぞここまで俺に近づいたもんだ。流石ノーリスペクト――最凶の男と言われるだけあるな」

「気配を消して不意打ちで殺してやろうと思ったが、そう簡単にはいかないようだな――」

たばこをふかしながらゆっくりと超人が歩いてきた。ターボメンが予想していた男、ノーリスペクト最凶の殺し屋ボーン・コールドであった。

東京ドームに戻ってきたチェック・メイトが巨大スクリーンを見ると、ノーリスペクト三人衆の姿があり、驚いていた。

「まさか、あの三人が闘ってくれるとは!」

「敵として恐ろしい奴らだったが、味方になると頼もしく感じるぜ!!」

ガゼルマンはノーリスペクトの参戦を歓迎した。

「グロロロ、勘違いするなよ子鹿ちゃんよ」

フォーク・ザ・ジャイアントがガゼルマンに言った。

「俺に関しては以前ミートのボディパーツ救出のために闘ったが、今回は刑期削減の報酬のためだ!」

ハンゾウは自身の闘う理由を説明した。

「俺達が万太郎との闘いで正義に目覚めたとも思っているんだろうが、俺達は根っからの悪人だぜ!!」

ボーン・コールドが自身の考えを言った。

「おいおいハラボテ! あいつらとんでもねえ事言っているじゃねえか! お前だろあの三人を外に出したの! 責任とれんのかよ!!」

ガゼルマンがハラボテにくっついてかかる。

「せ、責任ならイケメンがとってくれる。わしは知らん」

「え？ お父様！ それは酷い！」

「仕方なからう、新世代超人共が決して弱いとは言わないがあいつらとは戦力に差がありすぎる！ ノーリスペクトでもいいから手を借りるべきだと判断したのじゃ！ それに奴らがまた悪さをしでかしても、新世代超人達なら何とかできると信じておる」

「そんなこと言われたってごまかされねえぞ！ やっぱりあいつらだけに任せるわけにはいかねえ！ 休めとは言われたが、俺は行くぜ！」

ジャクリーンの制止をふりきり、ガゼルマンが完武の穴へと再び向かう！

すた

「なんだ!？」

ガゼルマンの前に白装束を羽織った二人の男が立ちふさがった。

ドガア

「ぐおっ!!」

白装束の男の一人がガゼルマンを左のラリアートで吹っ飛ばした。

『あ——つと！ 突如現れた二人組の一人がガゼルマンを片腕でふつと飛ばした——つ!!』

「怪我をしているとはいえ、ガゼルマンをあんなにも吹っ飛ばせるラリアートを出せるとは、もしかや……」

チェック・メイトが黒装束の男の正体に勘付いた。

そして、完武・完恐の穴に、白装束を纏った謎の二人組が入っていた。

完恐・ピークアブーの待つ日本国技館のリングに一人の男がやって来た。白装束をはぎ、その正体を露わにする。

「ホンギャ——ッ!!」

ピークアブーがその男の顔を見て激しく泣き出した。

「フィギュギュ、凶悪な顔なのは認めるがいきなり泣かれるとこっちも傷つくぜ〜」

『またもサプライズ!! かつて超人オリンピックでベスト4までのぼ

りつめた実力者！ 悪行超人の血を受け継ぎ、正義超人の技術を持った男、ヒカルドが電撃参戦です!!」

ストロング・ザ・武道の待つリングにも一人の男がリングインし、間髪入れずに突撃した。

「グロ!?!」

ガシイイ

両者リング中央で組み合った。

「このはち切れんばかりの筋肉の感触！ まさかお前は!?!」

「久々だな、まさか組み合った時の筋肉の感触で思い出してくれるとは、この歳まで身体を鍛えていた甲斐あったぜ」

恵まれた体格、はち切れんばかりの筋肉、そして特製のチョッキと仮面をつけている。かつて完狩の異名を名乗っていたネプチューンマンであった。

豚男への挑戦状!!の巻

ノーリスペクト三人衆に続き、突然のヒカルド、ネプチューンマンの参戦で皆が驚愕するばかりだった。そんな中、チエック・メイトは二人の目つきを見て、何かを悟る。

(彼らの目には悪魔超人特有のギラギラとした闘争心がある。しかし、同時に正義超人特有の慈悲の心が通ったところも見られる。それにヒカルドとネプチューンマンの二人が一緒にいると言う事は……)

ネプチューンマンとストロング・ザ・武道が対するリングでは。

「グロロロ、久しぶりだなネプチューンマンよ。貴様が完璧超人としての地位も永遠の命も捨て、下等に降りて以来だったかな」

「ご無沙汰していたな武道さんよ。いや、あやつと呼ばせて貰うべきか。本来のあんたの名前で呼びたいところだが、今の老害っぷりを見ると昔の名前で呼ぶ気が失せてくるぜ」

ぎいん

ストロング・ザ・武道の目がより血走ったものとなる。ネプチューンマンとの組合状態を強引に外した。

バチイン

「老害だと？ 人の事を言えるのか貴様は！ この完璧超人の恥さらしめが——っ!!」

ドゴオオン

ストロング・ザ・武道はネプチューンマンの顔面に強烈な右フックをくらわせた。ネプチューンマンの身体がリンググローブまで吹っ飛んだ。

「流石に効くぜ。やっぱいつになってもあんたは強い」

ネプチューンマンはストロング・ザ・武道の予想以上の攻撃の重さに苦笑いする。

「お前は完璧超人の再興とかぬかして、過去にいつていたようだな。その再興というのはよりゲスな下等超人になり暴れ回る事とか!! お前が過去で行った行為は完璧超人の品位を著しく下げる行いだっ

た!!」

「はははは、まあ批判する気持ちは分かるぜ。誰がどう見たって俺は最低の老害男だったからな。だがな、俺にも俺なりの考えがあった。それを分かかって貰うために危険を承知でやって来たんだ!!」

「いいだろう、お前を粛正してからたつぷりと言いついて聞か!!」

フォーク・ザ・ジャイアントとマックスラジアルの闘うリングである。

ドガ ドゴ ガキイン バキイ

『あ———つと! 両者真つ向から殴り合いです! 互いに巨漢の超人だけあって凄い迫力です!!』

「グロロ〜!!」

がしっ

フォーク・ザ・ジャイアントがマックスラジアルの右腕をとり、そのまま投げ飛ばした。

ずしいいん

マックスラジアルが勢いよくマットに叩き付けられ、会場が揺れた。

『フォーク・ザ・ジャイアント! なんと一本背負いでマックスラジアルの巨体を投げ飛ばした———つ!!』

「ここらでとどめといこうか———つ!!」

ダッ

『フォーク・ザ・ジャイアント! 空中高く舞い上がった———つ!!』

シャキ シャキ

『フォーク・ザ・ジャイアント! 四つのフォークリフトを突き立てて、ビッグラジアルへと落下する———つ!!』

「串刺し昆虫採集!!」

インセクトコレクション

「バルルーン、そうはいくか!」

マックスラジアルが立ち上がった。

グイイン

『ビッグラジアル！ 両肩の巨大なタイヤを回転させた——っ
っ!!』

「そんなタイヤ！ すぐにでもパンクさせてやるぜ!!」

『フォーク・ザ・ジャイアント！ ターゲットをビッグラジアルのタイヤ
へと変えた——っ!!』

ばきいん

フォーク・ザ・ジャイアントのフォークリフトは四つとも簡単に折
られてしまった。

「なにい?」

「そんなガラスの爪ごときで、マックスラジアル様の完裂地獄を止め
られると思ったか!!」

マックスラジアルはフォーク・ザ・ジャイアントにカナディアン
バックブリーカーをしかけた。

「マックスラジアル・インパクト——ッ!!」

ガガガガガガ

「ぐおわあああ!!」

フォーク・ザ・ジャイアントが苦痛に悲鳴をあげた。

『あ——っ!! フォーク・ザ・ジャイアントの背中が削られて
いく——っ!! このまま無残にノックアウトされてしまうか——

——っ!!』

「グロリア!!」

フォーク・ザ・ジャイアントは強引に技から脱出した。マックスラ
ジアルと対面する形でスタンド体勢をとるが、背中からはおびただし
い出血が見られる。

『フォーク・ザ・ジャイアント！ なんとか脱出しましたが、ダメージ
は大きいぞ——っ!!』

「バルル、完裂の異名通り、もっとお前の身体をずたずたにしてやらな
いとなー!」

『マックスラジアル！ 両肩のタイヤを回転させて再び襲いかかった
——っ!!』

「俺の身体をずたずたにしたいだど？ その願い叶えてやろうじゃね

えか!!」

がしっ

フォーク・ザ・ジャイアントは自分の身体をビッグラジアルの巨大タイヤにくつつけるように抱きついた。

ガガガガガガ

『フォーク・ザ・ジャイアント! なんと自らビッグラジアルの完裂地獄に飛び込んだ——っ!!』

「ぐおおおお!!」

フォーク・ザ・ジャイアントは苦痛を感じながらもマックスラジアルから離れようとしなない。

「やれやれ、やせ我慢を見せて下等超人なりのプライドでも見せようというのか?」

「グロロロ、まだ自分の身体の異変に気付いていねえようだなあ!」

ぼと ぼと

リングで闘う二人の足下にゴムのかけらがたくさん落ちていた。

「これはまさか、俺のタイヤのゴムか!」

「そうれ、もつと俺の身体を裂いてもらおうか——っ!!」

ガガガガガガ

『フォーク・ザ・ジャイアント! 自らの身体を犠牲にして、マックスラジアルのタイヤを破壊する気だ——っ!! 流星はノーリ

スペクトの一人! すさまじい根性を見せつけます!!』

「お前、自分が何をしているのか分かっていいのか!」

「うるせえな! 俺は勝利のために自分の身体が傷つくなんてこわかねえんだよ!!」

バゴオオオン

『フォーク・ザ・ジャイアントの根性が実った!! ついにマックスラジアルの裂殺タイヤが両方破裂した——っ!!』

「グロロロ、ついにやったぜ!」

「何がやったただ馬鹿が!!」

どがあ

『マックスラジアル! ショルダータックルでフォーク・ザ・ジャイア

ントを吹っ飛ばした——っ!!」

「俺の裂殺タイヤを破壊したその根性は褒めてやろう。しかし、その代償はでかかったようだな！」

がん

『マックスラジアル！ 右脚でフォーク・ザ・ジャイアントの顔面を踏みつけた!!』

「悔しいか？ しかし、今のお前には足を払う力すらないだろ？ お前は俺のタイヤを破壊するために傷つきすぎた!!」

がしっ

フォーク・ザ・ジャイアントがマックスラジアルの足をつかんだ。

「こいつ、まだこんな力が！」

「俺がこの鬨に参戦した理由は減刑だけじゃねえんだ……また鬨いたいやつがいる……そいつに挑戦状を叩き付けるために、俺はこんなところで倒れるわけにはいかねえ——っ!!」

フォーク・ザ・ジャイアントは万太郎との鬨の記憶を思い出し、力を振り絞った。

ぼわあ

フォーク・ザ・ジャイアントの身体が金色に光った。

「こ、これは!?!」

「見せてやるぜ！ お前らが馬鹿にする下等超人の底力ってやつをな!!」

どがあ

『フォーク・ザ・ジャイアント！ 起き上がりと共に、マックスラジアルの顔面にアッパーをくらわせた!!』

「馬鹿な、もう立つのもやつとの傷ついた身体だ!! それなのになんだこのパワーは!?!」

「そうら！ もういつちよ！」

ばきいん

『フォーク・ザ・ジャイアント！ 今度右後ろ上段回し蹴りをマックスラジアルの顔面にくらわせた!!』

「ばるるるるるる！」

マックススラジアルの身体を掴んで、フォーク・ザ・ジャイントが空へと飛んだ。

「まだおねんねしている万太郎ちゃんよ！　これがてめえに叩き付ける挑戦状だ——っ!!」

フォーク・ザ・ジャイントは自身の肩にマックススラジアルの後頭部をのせて、両足をつかみ、マックススラジアルの体をまげた。

『フォーク・ザ・ジャイント！　マックススラジアルに技を決めていく！　こ、この技はもしかやキン肉万太郎の技か——っ!!』

「ターンオーバーキン肉バスター——ッ!!」

どがああん

「ごはあっ!!」

どすうん

マックススラジアルは血反吐を吐き、その巨体はマットに倒れ、失神した。

カン　カン　カン　カン

ストロング・ザ・武道がマックススラジアルの敗北を確認すると、自身の竹刀を遠くへ投げた。

『フォーク・ザ・ジャイント！　もはや駄目かと思われましたがマックススラジアルを見事撃破した——っ!!』

ずしいん

フォーク・ザ・ジャイントの身体が前のめりに倒れた。

「へへ……こりやあしばらく動けねえや……」

マックススラジアルが意識を戻し、よろよろと立ち上がった。

「まさか、俺が負けたのか……」

「ああそうだ……もつとも、お前を殺しきれなかった事はノーリスベクトとして恥ずべき事だ……だからよ、次の試合こそはお前を必ず殺すぜ……」

「次の試合だと?」

「グロロ、そうだ。お前ともう一度試合がやりたいと言っているんだよ……」

「ふっ、そう言ってもらえるとは、対戦相手として嬉しいな。だがな

……」

ギューン

武道の投げた竹刀が飛んできた。竹刀は二人のいるマットに垂直に立った。マックスラジアルはふらつきながらも竹刀の方へと向かった。

「完璧超人として、負けたまま生き延びるのも恥ずべき事なんだ……」

マックスラジアルは飛び上がり、胸から竹刀に着地した。

ぐさあ

「ほおー！」

マックスラジアルは竹刀に突き刺さり、自害した。

「好き勝手生きてきた俺がお前の生き様を否定する資格はねえさ……まっ、お前ともう一度闘えないのは残念だがな……」

フォーク・ザ・ジャイントはマックスラジアルの亡骸を見て寂しげな顔をした。

学ばれた関節技!!の巻

誰も存在自体を知らない謎の施設に超人がいた。その超人はモニターにて完璧超人の試合を観戦している。

「完璧始祖の皆さんを守るために、消滅の道を選んだのですが、まさか別の世界に飛ばされるとは思ってもいませんでした。傷を癒やした後、どうしていいか分からずこの世界の行方を見守っていましたが、その理由が今日、ようやく分かった気がします」

超人は白装束を纏い、帽子をかぶった。

「平和主義者な私ですが、再び闘う時が来たようです」

その超人は完璧超人始祖の一人、サイコマンであった。

他の試合へと注目が集まった。ヒカルドVSピークアブーのリングである。

『え〜、突然のヒカルドの参戦に驚きましたが、ヒカルドの目的が完璧超人退治と分かり、観客からヒカルドの応援が飛び交います!』

「ヒカルド! ヒカルド! ヒカルド!」

ヒカルドはピークアブーに容赦なく鉄槌の雨あられをくらわせる。

バキイ バキイ バキイ

「フィギュギュ、これが完璧超人か〜! 手応えが全くないぜ〜!!」

『ヒカルドのパンチの連打にピークアブー何も出来ない!』

「ガードぐらいしたらどうでえ!」

「ほぎや! ほぎや!」

ピークアブーは泣きながら打撃に耐えている。

「可哀想じゃねえか! 赤ん坊をいじめるな!」

観客からヒカルドに野次が飛んでくる。

「何いってやがる! こいつは完璧超人だぞ! 敵なんだぜ!!」

「赤ん坊だろそいつは! あやしてやれよ!」

「つたく、変な観客がいやがるもんだぜ……まさか闘いの最中に赤ん坊をあやすなんざ生まれ初めてだぜ!」

ヒカルドは渋々とピークアブーをあやす。

「きやつ きやつ」

ピークアブーはヒカルドの高い高いに喜んでいる。

「なあんでな」

がしつ

ヒカルドはピークアブーの左手でピークアブーの首を持ち、右手でピークアブーの顔面にストレートを放つ。

『ヒカルド酷い！ あやすとみせかけて不意打ちの攻撃だ――

ーっ!!』

「学習その1……パンチはガードする……」

どい

『ピークアブー！ 肘を使ってヒカルドの拳をガードした！』

「じゃあこういうのはどうだ！」

ヒカルドがピークアブーを掴んでいた左手を話すと、鋭い右アツパーをかます。

すつ

『ピークアブー！ ヒカルドの鋭いアツパーをバックスウエーでかわしたー!』

「ほう、急に動きが良くなったな。じゃあこんなのはどうだ！」
がきい

ヒカルドが両腕でピークアブーの左腕に関節技を決める。

『ヒカルド！ ピークアブーに脇固めを決めた!!』

グキイ グキイ

「ホギヤ〜!!」

ピークアブーが関節技の痛さに悲鳴をあげる。

「どうだ痛かろう！ かつてバシヤンゴ師匠に教わった関節技はそう簡単には外せないぜ〜っ!! 関節のツボってというのがあってな、そいつを上手くついているからこそ痛い技となるのさ!!」

「関節のツボ……」

くるん

ピークアブーが技をかけられた状態から前転し、脇固めから脱出し

た。

「むっ！」

ヒカルドがピークアブーの異変に気付く。

「悪魔のカンだが、今こいつは、とてつもなく巨大な敵になりかけていやがる……」

「学習その2、関節のツボ……」

「早いところ勝負を付けた方がいいな！」

『ヒカルド！ ピークアブーにタツクルをしかけた！』

ピークアブーの顔を覆う手が剥がれ、幼い顔が現れた。

ばっ

『ピークアブー！ タツクルを読んでいたかのように、ジャンプ！』
がしっ

『ピークアブー！ 着地と同時にヒカルドの両手を踏みつけた！』

「こ、こいつはもしや!？」

ピークアブーはそのままヒカルドの両足を両手でつかみ、身体を曲げていく。

「ホンギヤ〜!! スッフアーラ!!」

ぐきいん ぐきいん

「こいつ、一度も出していない俺の技を盗みやがった!？」

モニター越しに武道がピークアブーの闘いを見る。

「ほう、早速始まったようだな」

ネプチューンマンもヒカルドの苦戦する姿を見て心配する。

「人様の事より、自分の命を心配したらどうだ〜っ!!」

『ストロング・ザ・武道！ 左のリアットでネプチューンマンに襲いかかった!!』

「おっと」

どがああん

『なんと！ 両者リアットの相打ち!! 互いに凄まじい威力です！

実況席にまで衝撃が響きます!!』

「グロロロ、お前のその左腕は健在のようだな」

「あんたにしごかれたからな。おかげさまで今も自慢の左だぜ」

ズツフアールをかけられながら、苦悶の表情を浮かべるヒカルドである。

「俺の関節技を盗むとは見事なもんだぜ、でもな、技のかけりはまだ甘いようだな！」

しゅっ

『ヒカルド！ 両手を滑らせて、ズツフアールから脱出した!!』

ヒカルドはスタンディングの体勢をとった。ピークアブーの思いもよらぬ強さにヒカルドが冷や汗を流した。

「こいつはとんでもない化け物を敵にしちまったみたいだぜ……俺の動きや技を凄まじいスピードで吸収して自分のものにしやがる！ならば、早期決着あるのみ！」

がしっ

『ヒカルド！ ピークアブーのうしろをとった！ ピークアブーの両脚の間に自身の両脚をからめ、さらに両腕をつかみ、そのまま、背骨を折るように曲げていく!! その形はまるで三日月のごとしだ!!』

「新技ムーンクラッシュ!!」

ゴキイン グキイン

「ホ、ホギヤア!!」

「手加減して逆転されても困るからな、一気に折りにいくぜ！」

「学習その3、早期決着あるのみ！」

『ピークアブー！ 技をかけられた状態で弧を描くように後ろへ飛ぶ！』

ヒカルドの技のかけりが甘くなり、ピークアブーの背中がのしかかる体勢となった。

ズダン

『ピークアブー！ ヒカルドの関節技から脱出した!! そのまま間髪入れずに、ヒカルドの身体をとらえて、空中へ舞い上がる！』

ガキッ

『こ、これは！ ヒカルドの必殺技、トーチヤスラッシュだ——
——っ!!』

「お、俺の最大の必殺技まで盗み出しやがった!？」

ズガァン

ピークアブーのトーチヤスラツシユがヒカルドに見事に決まった。

「ゴホハァー!」

ヒカルドが血反吐を吐いて倒れた。

『ヒカルドダウン! まさかまさかの展開です! こんな展開誰が予想したでしょうか!!』

「流石に首から落ちるところまでは真似できなかったが、それを差し引いても凄まじい威力だな」

ここまでまともに言葉を話せなかったピークアブーがまともな会話をし始めた。ヒカルドも何とか立ち上がってこようとする。

老害の激励!!の巻

「お前……喋れるのか?」

ヒカルドが質問しながら、起き上がってきた。

「ああ、急成長超人だからな!」

「グロロ〜、ようやく成長したようだなピークアブー!」

モニター越しにストロング・ザ・武道がピークアブーに話しかけてきた。

がしゅん

モニターにガラガラが放られて壊れた。ピークアブーが投げた物であった。

「あくあくまた壊しおつて、また買いに行かなくてはな〜」

観客席にいたガングロギヤルのたまきが反応を示す。

「あつ、そういうえば西松屋でバイトしていた時に、筋骨隆々の巨漢の男がガラガラを買っていた事があるわ! まさかそれがストロング・ザ・武道だったなんて……」

ピークアブーの表情にストロング・ザ・武道への怒りがこめられている。

「だったら、試合が終わる度にいちいち成長をリセットさせるんじゃないかねえよ!」

「いいやならんっ!!」

ストロング・ザ・武道が血走った目で威圧的な声を出す。

「お前が完恐たる理由は赤ん坊のごとき成長の早さにある! お前自身が強さを捨てる気か!」

「お前がその気ならこっちにも考えがある! ヒカルドよ! もっと強力な技をじゃんじゃんだとだしな! それともこれでお前の闘いは終わりか! お前に技を教えた師匠とやらも高々知れているな!」

ヒカルドがその言葉を聞いて表情が変わった。

「俺がなんのために闘っていると思う?」

「さあな?」

「俺はな……師匠殺しの罪を背負って闘っているんだ! ここで俺が

あつけなく倒れたら、バシヤンゴ師匠に申し訳ねえ！」

『意外や意外！ ヒカルド！ 悪行超人出身ながらも自身が殺したバシヤンゴ師匠の事を悔いていたようです!!』

「自分が殺した相手に申し訳なく思つて闘うというのか？ 俺には到底理解できない考えだな」

「理解できなくてもいい。でもな、それが俺の存在意義なんだ……正義超人でもない、悪魔超人でもない俺が……何のために……どうして闘うのか……それ以外理由がねえんだよ！」

「それは違うぞ!!」

ヒカルドにむかつて、モニター越しにネプチューンマンが叫んだ。

「お前の存在意義はそんなじゃねえ！ お前自身が魅力溢れる超人だからこそ存在意義があるんだ！ 例え、この世の誰もがお前の魅力を認めなくてもな、このネプチューンマン様だけはお前を認めるぜ！

その証拠を見せてやる！」

ぐわきい

『ネプチューンマン！ ストロング・ザ・武道の上半身に飛び乗り、アームロックと三角絞めを決めた!』

「あ、あの技は?！」

「グロロ〜!!」

ストロング・ザ・武道がネプチューンマンの関節技に耐えている。その技は、かつてヒカルドがジエイドとの闘いで使った技である。

「アラリーニャクラッチ!!」

「そう、こいつはお前とのスパーリングで身につけたものだ！ 俺には自信のあるパワーファイターだがストロング・ザ・武道はおれ以上のパワーファイターだ！ だからこういった関節技が非常に役に立つ！ そう、お前が師匠から受け継いだ技が俺を助けているんだ!!」

「ネプチューンマン……」

「罪を背負つて闘うだ？ 開き直れよ！ 俺なんてお前以上の罪を背負つて闘っている！ だがな、罪を背負ったからこそ強くなれたし、反省してより好きな自分に近づけたんだ！ お前が罪だと思つてい

る師匠殺しは、いわば師匠越えだ！ 批判する奴がいても堂々と胸をはれよ！ バシヤンゴ師匠とやらも、もしかしたら亡霊として応援しているかもしれないぜ！」

ネプチューンマンの激励で、ヒカルドの顔に生氣が戻ってきた。

「吹っ切れたぜネプチューンマン！ これがあんたへの礼だぜ——
——っ!!」

ヒカルドがウエスタンリアットをかましに行く。

「喧嘩ボンバー!!」

ドゴオン

「ぐわっ！」

『お——っ！ ヒカルド！ まさかのネプチューンマンの得意技の喧嘩ボンバーでピークアブーを吹っ飛ばした——っ
!!』

「これで終わりじゃねえぜ！」

ヒカルドがすぐにピークアブーのバックをとった。

「ダブルレッグスープレックス!!」

がああん

ピークアブーは頭からマットに勢いよく叩き付けられた。

「ウギヤア——ッ！ なぜだ！ なぜこいつの技が読めないんだ!？」

「お前は確かに俺を上回る俺の技術を身につけた。俺以上の俺になつたと認めてやる。でもな、今のお前は俺以外の他のファイターに対応できる技術まで身につけてねえんだ！」

がきい ぐわきい

「喧嘩スペシャル!!」

「ホギヤ——ッ!!」

ヒカルドが渾身の力をこめて、ピークアブーの体を破壊しにいった。

ぼきん ぐきん

「ぐはあっ！」

ピークアブーの関節が破壊され、その衝撃にピークアブーは失神した。

カン カン カン カン

『ヒカルド勝利！ 敗北必須と思われましたが、まさかのネプチューンマンの必殺技を使うという奇策で逆転につなげました!!』

「打撃や投げは俺ほどではないが、固め技に関してはおれ以上だな。流石は関節技の芸術者だぜ」

ネプチューンマンがヒカルドの勝利をたたえた。

「ヒカルドよ……俺は全身動かせない状態ではあるが、かろうじて息はあるぜ……俺の命を完全に奪えなかったところ見るとまだまだ下等といったところだな……とはいっても俺は自害できる状態じゃねえ……だから勝者であるお前への敬意として、俺を殺させてやるぜ……」

「勘違いするな、俺は故意的にお前を殺さずに完全に動けない状態にしたんだ」

「なに、俺を殺さずにどうしようという気なんだ？」

「何もしねえよ、あえて言うなら、殺す理由もねえし、お前に自害させる理由もねえ、死なせたくなえからだ。それが俺の中にある、正義超人としての信条だ……」

その言葉を聞いたピークアブーガ和やかな表情になった。

「ははは、お前は興味深い超人だ……もつとお前の事を知りたいが、ストロング・ザ・武道が許さないだろう……俺は敗北した、だから死の運命からは逃れられないのだ……」

ばしいん

ヒカルドがピークアブーの頬をたたいた。

「逃れられない運命だ？ 逃げずに己の運命と闘いな、俺も俺でくそつたれな運命から逃げずに真っ正面から闘った。そしてお前に勝つ事ができる強さを手に入れた。つまりよ、今のお前もつと強くなるチャンスがあるってことだぜ！」

「強くなれるだど？」

「そうだ！ 自害をうながすストロング・ザ・武道とやらはてめえよりはるかに強いんだろ！ でもおめえは急成長超人！ 死ぬ気で奴を

倒せばお前が最強になれるかもしれないねえんだぜ！」

ピークアブーはそこまで話を聞いて泣き出した。

「つ……強く……なりたい……まだまだ強くなれるのなら俺はもつと……もつと強くなりたい!!」

ヒカルドがその顔を見て笑いを見せた。

「よし、俺の腹も決まったぜ！ 誰かがお前を殺すっていうんなら、お前が動けるようになるまで、俺が完璧超人の相手になってやろうじゃねえか!!」

「よく言っただぜヒカルド!!」

モニター越しにネプチューンマンが褒めた。

「馬鹿もんが——っ!!!」

会場の観客に鼓膜が破裂するような怒声が響いた。

「すっかり惑わされおつて……そこにいるネプチューンマンもかつては完璧超人のエースだった男なのに、正義超人と闘って変わってしまった……ピークアブー、見せてやろう、お前がどうなるかをな！」

ストロング・ザ・武道がネプチューンマンを軽々と持ち上げて、自身の膝にネプチューンマンの頭部をあてた。

「完武・兜砕き!!」

がぎいいん

「ぐはあっ！」

ネプチューンマンの頭部から大量に出血し、マスクにもヒビが入り、片目が見えるほど半壊した。ネプチューンマンはたまらず倒れた。

『ネプチューンマンダウン！ ストロング・ザ・武道恐ろしいほど強いっ!!』

ネプチューンマンは力を振り絞って、立ち上がってきた。

「へへっ、俺もヒカルドに続かねえとな……見せてやるぜ！ 新しい超人の生き方ってやつをな!!」

苦渋の悪行!!の巻

ところかわり超人KO病院。先に完璧超人にKOされたイリューヒン、バリアフリーマンがハンゾウの試合をTVで観戦していた。二人はかつて共に悪魔種子に立ち向かった同士の活躍を喜ばしく見ていた。

試合会場は、特設水面リング。両者は激しくにらみ合っている。

「トトトトト、カジキ野郎よ、オレの妖腕刀で貴様を三枚おろしにしてやるぜ〜!!」

「ピョ〜ピョピョ、変に良心のある超人では精神的にやりづらいところもあるが、お前のような無慈悲な男なら思い切り殺れるというわけだ!」

マーリンマンはロープへと飛んだ。

グイン

『マーリンマン! ロープのリバウンドを利用した攻撃に出るぞ!! 上あごの梶木通しをまっすぐに突き立てて飛び出した———
——っ!!』

「フライングソードフィッシュ!!」

ザツ

『ハンゾウ! 初動が遅れ、腹部に切り傷を負った!! すかさずマーリンマン! キックターンで再度ハンゾウを襲う!!』

「完璧超人というわりには、展開を読むことに関してはど素人のようだな」

『ハンゾウ! マーリンマンの攻撃に合わせ妖腕刀を振り上げた——

——っ!!』

キイイン

マーリンマンの梶木通しとハンゾウの妖腕刀が衝突した。

『両者の武器の威力は互角だったようだ———っ!!』

「トトトトト、なかなか頑丈な梶木通しのようにだな〜!」

「おまえこそ、なかなかの硬度の刀を持っているようだな〜」

「オレはこの闘いでお前の完璧超人としての誇りを粉碎するために来

た。ならば陸でお前を倒しても意味は無い！」

ハンゾウは自ら水中へと飛び込んだ。

バシャーン

『ハンゾウ自殺行為か——つ!! 自らマーリンマンの得意な水中戦へと持ち込んだ——つ!!』

「半端な実力を持った下等超人というのは、身の程以上に調子に乗るようだな！」

バシャーン

『マーリンマンも水中へと飛び込んだ——つ!!』

マーリンマンは水中でハンゾウをみつけるとすぐさま攻撃にしかけた。

「このマーリンマン様相手に同じ土俵で闘おうとはドあほうつてもんだぜ!! 水中ではオレの方が有利だ! フライングソードフィッシュ!!」

『マーリンマン! リング上で見せるよりも素早い動きを見せる!!
ハンゾウ一步も動けない!!』

マーリンマンの攻撃がハンゾウの喉をとらえる寸前であった。

ガゴオン

マーリンマンの両サイドから重い打撃が加えられた。

「ピョガア！」

「トトトト、オレが策もなしに無謀な水中戦に持ち込んだと思うか?」

『あ——つ! 分かりづらいですが、水中に二人の人形が存在しています! その人形同士がエルボーでマーリンマンを挟みこむように攻撃していた——つ!!』

「ハンゾウ流極意! 傀儡水人形!!」

「馬鹿な!? お前のその技は水中では使えないはず! それに同時に二人も出せるなんて!!」

「オレがただ檻でのんびりと過ごしていたと思っていたのか? オレもフォーク・ザ・ジャイアント同様、憎き奴の再戦に備えて自身の技を磨き上げてきた! お前にはオレの練習台となって貰おう!!」

「練習台だと！ 完璧超人を舐めるなよ!!」

『マーリンマン反撃だ！ 自身の両脚をハンゾウの肩にかけ、両手で首をとらえた!!』

「ピラニアンシュート!!」

『マーリンマン！ ハンゾウを岩盤に叩き付けるつもりだ——
——っ!!』

「さっきも言ったがお前は展開を読むことに関してほど素人だ」
がしっ

「ピョッ!? 手応えがないだ?!」

『あ——っ! ハンゾウの作り出した傀儡水人形二体が、ハンゾウの身体を岩盤に叩き付けられる前にとらえ、技の威力を最小限に抑えた——っ!!』

「それ以上生臭い身体をオレにくつつけるな！」
どが

ハンゾウは両脚を使って技をかけているマーリンマンを突き放した。

「おのれくく、一対一で正々堂々と立ち向かわずに卑怯な!!」

「卑怯? ならばお前のリクエストに応えて、技を真っ正面から受けてやろうではないか?」

『ハンゾウ！ 無防備状態でマーリンマンの技を受けるつもりだ——
——っ!!』

「調子にのりすぎたようだな！ 今度こそお前をこの一撃で仕留めてやる！」

マーリンマンが助走のため、ハンゾウから距離をとる。そして梶木通しをハンゾウの心臓にめがけ、勢いよく飛び出した。

「完刺スピアフィッシング!!」

『マーリンマン！ この試合で一番速い動きを見せた!! マーリンマンの技の衝撃で周りを泳いでいる魚がふつとばされ、岩が砕け散る!!』

「ハンゾウ流極意！ 河童変化!!」

にゆうく

ハンゾウの手足に水かきが産まれた。

『ハンゾウ！ 得意の忍術でなんと河童のごとき手足になった！』

「これでお前と一緒に水中でお遊びができるぜ!!」

ギューン

ハンゾウはマーリンマンに向かって、勢いよく泳いでいった。

「ピョオツ!? まさかこっちに向かってくるだ!!」

『ハンゾウ！ 妖腕刀を突き出しながらマーリンマンにアタックだ!!』

がきいいいん

ハンゾウの妖腕刀とマーリンマンの梶木通しが激突し激しい音を鳴らした。

『両者の最大の武器が激突した！ はたしてどちらが勝ったか!!』

ピシイ バキイ

マーリンマンの梶木通し、そしてハンゾウの妖腕刀にヒビが入り、使い物にならなくなった。

「ま、まさかそんな!？」

「相打ちか、まあいい。お前の得意な水中戦で下等超人相手に互角に渡り合ってしまった気持ちはどうだ?」

「黙れ!!」

ぶおん

マーリンマンはハンゾウを岩盤に投げつけた。

「ぐおはあっ!」

「確かに俺の梶木通しはぼろぼろだが、お前をこの一撃で仕留めれば問題ない!!」

『マーリンマン！ 再度アタックをしかける!!』

ぶつん

突然、水中モニターの画面が写らなくなってしまった。

「おいどうした！ 写らねえぞ!」

「超人委員会何やってんのよ!」

『どうやらマーリンマンの技の威力で水中カメラも壊れてしまったよ』

うです！ これでは水中で何が起きているのか全く分かりません！』
バシヤア

水面からマーリンの顔が見えた。

『マーリンマンが浮かび上がってきた!! これはハンゾウがやられてしまったというのか!!』

じわあ

水中から出ているマーリンマンの顔付近の水が赤く染まっていく。
バシヤア

マーリンマンの顔をつかむハンゾウの腕が現れた。その瞬間、マーリンマンの顔面がそぎ落とされた事実を観客が気付いた。

「きやああああ!!」

「うわああああ!!」

会場は阿鼻叫喚の渦。観客の悲鳴が鳴り響く。

「トトトト!!」

ハンゾウが水面から出ると、誇らしげにマーリンマンの顔面を高々と上げた。

カーン カーン カーン

『なんということだ！ ハンゾウがマーリンマンの顔面を剥いでKO勝利です!! 一体水中でどのような残酷な事が行われていたのでしょうか!!』

ぶつ ぶつぶ

モニターが映し出された。

『これは補助で設置されていたTVカメラの映像のようです！ こちらでリングの惨劇の真相を知りましょう!! あっ、マーリンマンのスピアフィッシングが決まるところです』

マーリンマンの技がハンゾウに決まる直前、両者の身体が消えた。

『これはどういう事だ！ 両者の身体が消えてしまった!!』

ボワ

そして、両者の身体が現れ、技のかけ手と受け手も入れ替わっていた。本来マーリンマンの攻撃がハンゾウの心臓を貫くところ、ハンゾ

ウの妖腕刀がマーリンマンの心臓を貫いていたのだ。

「ま、まさかこんな事が起きるなんて!？」

大阪の串カツやで試合を観戦しているサンシャインがハンゾウの使った技に注目した。

「あの技を使える超人はもう亡くなっている！　なぜにハンゾウが!!」

「死者に敬意を持たないお前にとっては、オレがこの技を出すことは全くの想定外だっただろうなあ」

「どこかで見たことある技かと思っただが……そういうことか……ピョガハア！」

マーリンマンは血反吐を吐き、すぐに息絶えた。ハンゾウは自身がかつて殺したザ・ニンジャの襟巻きを握りしめた。

「やれやれ、お前も酷な道を選ばせるもんだな……まあ、それがオレの罪滅ぼしでもあるか……」

ハンゾウは誰かからメッセージを受け取ったような事をつぶやいた。

「完璧超人にとって、自害なき敗北こそ誇りなき死！　しかし、それ以上の誇りなき死をお前に与えてやろう！」

『ハンゾウ！　妖腕刀を振るった！』

スパア

マーリンマンの顔面がハンゾウの妖腕刀によって削がれた。

ここでモニターの映像がとどえた。

『これが試合の真相か!!　ハンゾウ！　悪魔種子との闘いで正義超人に目覚めたと思いましたが、また、元の凶悪な悪行超人へと戻ってしまっただようです!!』

「トートトト、次なる試合のために妖腕刀を研いでおかんとなく〜!」

「帰れ悪魔め!」

「お前なんか一生牢獄にとじこめられていればよかったんだ!」

観客からハンゾウに向けて罵声が飛んでくる。

ピラピラ

ハンゾウの身体から写真が一枚落ちた。TVがたまたまその写真を写しだす。写真にはハンゾウ、ケビンマスク、スカーフェイス、バリアフリーマン、イリユーヒンの姿があった。その写真が何かを分かったのはイリユーヒンとバリアフリーマンであった。

「あれは！ 悪魔種子との闘いの前に、わしが女子盗撮用に買ったカメラで撮った集合写真じゃ！」

「あいつ、いまだに肌身離さず持っていたのか……」

「むむむ、試合は惨劇そのもの。ハンゾウが悪行超人と思割れても仕方ない。しかしわしらは信じよう。奴にも正義の血が流れていることを！」

復活の殺し屋!!の巻

『さあこちらのリングではボーン・コールドVSターボメンが行われていきます!!』

「おうらあー!」

ボーン・コールドはターボメンの横から胴体を掴み、そのまま後ろにたたきつけた。

があん

『ボーン・コールド! サイドスロープレックスでターボメンをマットに叩き付けた!!』

「これでおわりじゃねえー!」

ボーン・コールドはマットに転がるくターボメンの脚に素早く自身の脚を絡めて、両手で脚をひねりにいった。

『ボーン・コールド! 間髪入れずに今度は足十字だ!!』

「ボシユシユ、なるほど、流石のレスリングテクニクだな!」

ターボメンは体を回転させて、ボーン・コールドの脚十字から脱出した。

『ターボメン! ボーン・コールドの技から脱出した!!』

「完璧超人たるもの知識も完璧、お前にはこういうのが効くんじやないのか?」

ぶちん

ターボメンがリングロープをちぎり、手で振り回せるぐらいのサイズにした。

ばしん ばしん

「うう……」

ボーン・コールドがためらう表情を見せた。

「やはりな。確かにお前のレスリング技術は素晴らしい。最凶の殺し屋と言われるだけのことはある。だが精神は弱いままのようだな。お前は親父であるキン骨マンに酷く虐待されていたと聞く。こんな風に鞭で叩かれたんじゃないのかな!!」

ばしん ばしん

『ターボメン！ リングロープを鞭のように扱い、ボーン・コールドをはたいていく!! ボーン・コールド動けない!!』

「お前は万太郎との試合でも親父の虐待話を切り出されてから途端に弱くなった!! お前はあの時と何も変わっちゃあいないのだ!!」

がしい

ボーン・コールドはターボメンのふりまわすリングロープをつかまえた。

「ボシユ!？」

「あのくそ親父のやったことは未だにひでえ思い出だ。不快に思う。しかし俺は万太郎との試合以降、親父の気持ち分かるようになってきた。だんだんと冷静になり、いつしか虐待の過去にとらわれているのが馬鹿馬鹿しくなった!」

ぐいん

ボーン・コールドはリングロープを思い切り引っ張り、ターボメンがそれにつられた。

「あとよ、完璧超人というのは凶器を使っちゃあいけないんじゃないやなかったのか!!」

がごん

『ボーン・コールド！ 前蹴りでターボメンの顔面を攻撃だ!!』

「ボ、ボシユ〜」

ターボメンがよろめいた。

「これで決めさせて貰うー!」

ボーン・コールドがターボメンの頭を両膝ではさみ、両手で両脚をとりにいった。

「3Dクラッシュユー!」

『出ました！ ボーン・コールドの必殺技3Dクラッシュユー!! ターボメン苦しそうです!!』

びきい びしい

ターボメンの体に亀裂が入り始めた。

「流石は完璧超人、俺が以前殺したジャイロに比べて頑丈な体だ。しかし、その分苦しい時間は長いだろうな——っ!!」

ぴしっ　ぴしっ

ターボメンの体は徐々に破壊されていくが、危機感を感じさせない態度を保っている。

「ボシユボシユ、なるほど、良い技だ。この体にエネルギーが貯まっていくのがよく分かる!!」

ぴかあ

『なんだ——っ!!　ターボメンが発光し始めたぞ!!』

「それがなんだってんだ!」

「ボーン・コールド、お前の強さに敬意を表する。お前が強すぎるがために、俺のターボチャージャーにエネルギーがすぐ貯まったからな!」

ターボメンからアースユニットが出てきた。アースユニットはボーン・コールドの体にパワーを送り込む。

「アースクラッシュ!!」

ばばばば

「ぬおっ!」

ボーン・コールドは自身の力が強くなるのを感じた。同時に殺し屋の坎が得体の知れない恐怖を感じた。

ぶしゆ　ぶしゆ

ボーン・コールドの腕や脚が出血しはじめた。

「ぐわあ!」

ボーン・コールドはたまらず技を外した。

「ボシユボシユ、技というのは技のかけ手にもダメージを与えるものだ。俺のアースユニットにより、お前のパワーが上がり、さらには技によるダメージも増強したのだ!!」

「けっ、そう簡単に都合良くいくかよ!」

ばあん

『ボーン・コールド!　空高く飛び上がり、自身の衣装を脚に巻き付けてドリルの形状にした』

「ナスティギムレット!!」

ぎゅいいん

『出ました！ 万太郎戦において、万太郎に大きなダメージを与えた技だ!! これは完璧超人といえど危ないでしょう!!』

びたっ

突如ボーン・コールドの動きが止まった。

「ぐっー」

ぼきん ぼきん

「ぐわああああ!!」

『どうしたことか！ 技のかけ手であるボーン・コールドが苦しんでいるぞ!!』

『ボシユボシユ、回転の勢いの強さに自身の骨を痛めたようだな』

ボーン・コールドは何もしないまま、マットに着地した。

「くそっ、全く攻撃ができないってことかよー！」

「そうとも！ お前は俺におとなしくやられるしか術はないのだ!!」

『ターボメン！ 両腕のリボルバーを伸ばし、ボーン・コールドのこめかみをモンゴリアンチョップしにいっく!!』

「タービンチョップ!!」

がー

「ぐおー」

ボーン・コールドは思わず膝をついた。

「まだまだ終わらない！ 完遂リボルバーフィン!!」
ぎゅいいん

『ターボメン！ 右腕のリボルバーから鋭い針を数本出して回転させるー!』

ぐさあ

「ぐはあー」

ボーン・コールドに鋭利な針が複数刺さった。

ぎゅいいん

『ターボメン！ ボーンコールドをリボルバーフィンで突き刺し、そのまま空中にはなった!!』

「これでとどめだ!!」

がしっ

『ターボメン！ 空中でボーンコールドに技を決めにいった!!』

「コンプリートステイング!!」

がああん

「ごほっ！」

ボーン・コールドがマットに叩き付けられ立てない。

『ボーン・コールド!! ターボメンの怒濤の攻撃についてダウン!!』

もはや打つ手なし!! このまま敗北してしまうか!!』

「初めてだぜ……ここまで追い詰められたのは……」

「ボーン・コールドよ、辛かろう？ 今なら自害させてやるぞ。それと

も起き上がれぬならとどめをさしてやろうか？」

「馬鹿言うんじゃねえ……」

ボーン・コールドはロープをつかみながら立ち上がってきた。

「最高に楽しいんだ……ここまで一方的に追い詰められるのは初めての経験だ……」

「流石は最凶の殺し屋、よかろう！ 貴様が息絶えるまで全力で相手

をしてやる!!」

すう

ボーン・コールドはでこぴんの体勢に入った。

「ボシユ？」

ばしいいいん

「ボシユラツ?!」

ターボメンがでこぴんの衝撃でリングロープまで吹っ飛ばされた。

『あ——っ！ ターボメン！ まさかのボーン・コールドのでこぴん一発で思い切り吹っ飛ばされた——っ!! これは一体どういうことだ!!』

「ムヒヨヒヨヒヨ、なんでこんな単純な事に気がつかなかったんだろ
うなー！」

「き、貴様!」

「アースユニットはえげつない技だ。普通に技を出してもダメージに

なりやがる。現に俺がでこぴんをやってもちよいと指が痺れている。しかしな、この技はお前自身のパワーまで相手に送り込んでしまう弱点がある。いくらパワーアップしているとはいえ、俺のでこぴんこときでもこの有様だ！」

「ボ、ボシユウ——ツ!!」

この試合、ターボメンは初めて恐怖を感じた。

「その恐怖、たまらなくいい。もつと悲鳴をあげてくれや」

ばしいいん ばしいいん

『ボーン・コールド！ まさかの発想！ なんとパワーアップしすぎた体を逆に弱い技を出すことにより、闘い方を調整した!!』

「ボシユウ……」

力に差がありすぎるため、ターボメンはでこぴんの連打でグロツキーな状態になった。

「殺し屋の俺がこんな締めりのねえ終わり方をさせるわけにはいかねえな」

すつ

『ボーン・コールド！ ナイフのついた右腕をあげた！ ついにあの技ができるか!』

「あばよ」

ばしゅうううん

ボーン・コールドのシューティングアローは勢いよく飛び出し、ターボメンに命中した。

ぐわあつしやあ

シューティングアローのあまりの威力に、ターボメンに巨大な風穴があいた。

「ボ……」

ターボメンの目から光が消えた。完全に息絶えたのだ。

カン カン カン カン

『勝ちましたボーン・コールド！ 追い詰められましたが流石最凶の殺し屋!! 最後はその異名に恥じないフィニッシュで決めました!!』
「やれやれ、勝ったとはいえ右腕が使い物にならなくなっちゃった。

しばらくは戦線離脱だな……」

魂の対話!!の巻

ガゼルマン、チェックメイトが観戦をしている中、二人の超人が完璧超人の作り出した穴から帰ってきた。

「ト〜トト」

「フィギュギユ」

「ハンゾウとヒカルドか!」

ヒカルド、ハンゾウが帰ってくるとすぐに試合観戦用のモニターを見た。

「どうやらここまで完璧超人を全員負かしているってところだな」

「ああ、残すはネプチューンマンVSストロング・ザ・武道の試合なんだが……」

チェックメイト、ガゼルマンの顔は浮かなかつた。ネプチューンマンはストロング・ザ・武道相手にまるで歯が立たない状態なのだ。全身から流血し、仮面も半分割れている。

「グロロロ、一応元完璧超人のお前への礼儀として全力でぶつかっているのだが、しづといことだ」

「そりやどうも、何十年間も山にこもって鍛錬は続けていたからなんだだだだ」

ネプチューンマンが武道に向かって走り出し、両足をあげるようにしながら水平にジャンプした。

『ネプチューンマン! ストロング・ザ・武道にドロップキック!!』
どごおん

ストロング・ザ・武道に重い一撃が与えられたが、平然とした状態である。

「並の完璧超人なら有効打になっただろうが」

ぐいん

ストロング・ザ・武道はネプチューンマンを抱えて、頭上まで持ち上げてからマットにたたきつけた。

ずしいいん

「ぐはあー!」

『ストロング・ザ・武道のボディスラム！ ただのボディスラムなのに重い一撃です!! ネプチューンマンに効いているぞ!!』

「まだ……まだ……」

『ネプチューンマン！ なおも立ち上がってくる！ 一体どこからの闘志は湧いてくるのか!!』

ストロング・ザ・武道は攻撃の手をいったん緩めた。

「ネプチューンマンよ、今一度聞く。何故お前はそうまでして闘うのだ？ 姿を隠そうと思えば隠せる身、危険をおかしてまで、そしてよりによって私に対戦をしかけるとはな。なぜだ？」

「へっ、まずあんた相手に口先で言っても通じねえ事はよく分かる……それでもあんたと対話をしなければならなかった……」

「対話……」

「そう、俺が伝えたいのは対話の精神……目の前にいる相手の考えを正すために魂で言葉を交わす必要がある!!」

がしっ ぶおおん

『ネプチューンマン！ なんとストロング・ザ・武道の巨体を上空へ放り投げた!! 体格で見劣りするとはいえ流石パワーファイターだけあります!!』

ネプチューンマンも上空へ飛び、ストロング・ザ・武道の首に4の地固めをかけた状態で頭から落下していく。

「新時代の新たな流れを見せよう！ 俺が正義超人との交わりで手に入れた力だ!! 掟破りのロビンスペシャル!!」

『ネプチューンマン！ 伝説超人のロビンマスクの必殺技を使った!!』

「惑わされおって……」

むき むき むき

ストロング・ザ・武道は自身の首の筋肉を発達させて、絡みつくネプチューンマンの脚のフックを弱くした。そして難なく技をほどこした。

『ストロング・ザ・武道！ あっさりとネプチューンマンの技を破った!!』

「お返しと言ってはなんだが、お前のかつての相棒の技を出してやろう。いや、かつて私の技だったが、似非完璧超人にさも自分の技のように使われてしまった技というべきか」

すたん

『ストロング・ザ・武道！ ネプチューンマンの足の上に乗つかるよう
に自身の足をのっけて落下だ!!』

「メガトンキング落とし!!」

ががああん

『あ——っ!! ストロング・ザ・武道の巨体による落下技!! これ
はネプチューンマンといえども耐えきれるか!!』

「まだだ……」

ずぼっ

マットにはまった頭を抜くようにしてネプチューンマンが立ち上がった。しかし、目の焦点が合っていない状態である。

「もはや立つのもやつと状態か。お前ほどの実力者なら分かるだろ。はなっから勝負にならない戦力差だと。そこまでしてお前は何が伝えたいのだ?」

「俺が言いたいのは……他属性の超人の良いところを……完璧超人も身につけるといいんだ」

「下等超人の真似事をしろというのか?」

「その通りだ……俺は今日まで本当に完璧なる力を得ようと努力してきた……完璧超人、正義超人の精神を学び、良いところを吸収したつもりだ……だがそれでも満足する力には至らなかった……だからこそ俺は過去の世界において悪に手を染めた!!」

「ほう……良いだろう、お前の言い訳をたっぷりと聞いてやるか」

「ありがてえ……俺は自分がどんなにさげすまれようとも……悪の道を進んで本当の力を得るヒントが欲しかった!! でも半端な悪にしかなれなかった……変に善良心がありやがった……我ながら迷走しまくりの老害マンってところだったぜ……」

「ふん、貴様が力を得るために何をしても良いとぬかすか!! おまけ

に結果もともわずとは酷い有様だ!!」

「酷い有様は認めるぜ……でもな、これは俺が力を得るためだけじゃねえ! 後世の超人達へのバトンタッチに必要な行為だと思っただらだ!!」

「それはどういうことだ？」

「俺は一度過去で死んだんだ……でも命を賭して俺を救ってくれたお人好しのヒーローがいてな……俺に正義超人の後進の指導を頼む……悪行超人の罪深さ、正義超人としての誇り、その二つの心を持つからこそ授けられるものがある……そういつてくれたんだ……」

ネプチューンマンは過去の世界でカオスに命を救われた事を思い出しながら涙ながらに話した。

「涙か、そんな感情を持つとは完璧超人として失格だな……お前の言いは分かった……判決を下す!! お前が完璧超人の精神を忘れていないなら今すぐに自害しろ!! それが私のせめてもの慈悲だ!!」

「通じねえか……」

「なんでわからねえんだ!!」

モニター越しにヒカルドが怒りを露わにした。

「ストロング・ザ・武道! 少なくともこの俺だけはネプチューンマンの言っていることは正しいと分かる!!」

「ヒカルド……」

「俺は超人オリンピックで敗北してから孤独に一人で修行していた!! そんな時にわけのわからねえおっさんが俺を鍛えにやって来た!! でもこの肉体を通してそのおっさんは俺に超人の属性の垣根を越えた新しい超人のありかたを示してくれた!!」

ヒカルドの必死の声もストロング・ザ・武道に届いた様子はない。

「グロロ、ネプチューンマンよ。お前も罪深い奴だ。惑わされた奴があそこにもおるわ」

「そうだなヒカルド……まだまだ教えなきやならねえ事がある! 後進達を守るためにも……そして目の前の男を救うためにも……ただで死なねえ!!」

ぼわあ

ネプチューンマンの体が金色に光った。

「グロ!? これは!!」

「お前の目を覚ますために、この一撃に全てをかける!!」

ドドドドド

『ネプチューンマン! 自慢の左腕を水平にかまえてストロング・ザ・武道に向かった!!』

「受けて立とう! お前の精神に!!」

ストロング・ザ・武道も対抗して左腕をかまえた。

「喧嘩ボンバ——ツ!!」

ずがあああああん

『両者左のラリアットで激突!! 凄まじい衝撃が実況席・観客席にも響いております!!』

ネプチューンマン、ストロング・ザ・武道は互いに左ラリアットを相手の顔面にくらわせる相打ちになった。

「ぐはあ!」

ネプチューンマンが血反吐を吐き倒れた。

カン カン カン カン

『ああ——つ!! ネプチューンマンが倒れた! 残された力を全て使い果たした乾坤一擲の一撃でしたが、勝利につなげられなかった

——つ!!』

「グロロ……」

びきん ばきいん

『あ——つ!! なんとストロング・ザ・武道の仮面が割れ、その素顔が明らかになった——つ!!』

ネプチューンマンは倒れながらもストロング・ザ・武道の素顔を見た。

「やっと会えたな……ザ・マン……」

新たなる参戦者達!!の巻

「あれがストロング・ザ・武道の素顔……」

観戦している観客や超人がその顔をまじまじと見た。

「やはり、中の超人はネプチューンキングではなかったか」

「しかしあの超人は一体……」

過去にビッグ・ザ・武道の素顔を見たハラボテとミートが話し合う。

しかしその正体は見当もつかなかった。

「グロロロ、まさかの私の面を割るとはな。元完璧超人の意地は見せたと言うところだな。さて、自害する力もなからう、私が特別に介錯をしてやる」

「ま……待ちな……自害にあんたの手はいらねえ……」

ネプチューンマンが意識を取り戻した。

「ほう、まだ動けるか。」

ネプチューンマンがカプセルを取り出すとストロング・ザ・武道の顔色が変わった。

「貴様！・それはっ!？」

「そう……かつて俺が自害に使った人狼煙用の爆弾さ……元々は死んだ命……しかし友情という絆で俺は三度も蘇らせて貰った……いい加減友情に対し恩返ししないとなあ……」

ネプチューンマンはカプセルを飲み込み、ストロング・ザ・武道の足をつかんだ。

「貴様っ！・私を道連れにするつもりか!!」

「こんなもんじゃあんたほどの人が死ぬとは思えない。だがな、時間稼ぎくらいにはなるだろう」

ネプチューンマンは試合を観戦する新世代超人達に目を向けた。

「俺はもうすぐ死ぬ……でもな、お前らは生き残るんだぜ……」

「ネプチューンマン……」

ネプチューンマンが穏やかな表情となった。

「一つだけ幸いな事があったな……俺が外道に堕ちきつたからよ……俺が死んで悲しむ奴がない……そこだけはあるがてえところだ

……」

ネプチューンマンの身体にまばゆい閃光が生じた。

チュドオオオン

崖の上に特設されたリングは大爆発し、煙幕が漂う中、リングは崖下のはるかかなたへ落下した。ストロング・ザ・武道の生死も不明の状態となった。

「ネプチューンマン……」

ネプチューンマンの壮絶なる死に、誰しもが言葉を失った。

「犠牲は多く出ちまったが、これで完璧超人は全員倒し平和を取り戻したんだ!!」

ガゼルマンが場の空気を変えようとした。

「ふはははは!! これ以て終わりと思ふなよ!!」

空から不敵な声が聞こえてきた。見ると、上空から数人の超人が降りてきた。

「さあ第二陣といこうじゃないか!!」

それは新たに参戦する完璧超人達だった。

「ガゼルマン! あなたが変な事を言うから!」

「俺が悪いっていうのかよチエックメイト!」

チエックメイトとガゼルマンが喧嘩をはじめた。

「ん?」

完璧超人の中に一人異様な姿の男がいた。キン肉族特有の頭の形状、分厚い唇、豚鼻をした超人であった。

「あれ、まさかキン肉族のやつか!」

「ミート! あれが誰か分かるか!」

「い、いえ、僕も全く見たことがない方です!」

「じゃあハラボテあたりなら知ってるだろ!」

「いや、わしもキン肉族とは付き合いは長いがあの男は見たことがない、って元委員長に対してその口のきき方はなんじゃ!!」

「委員長! 青筋たててる暇はないですよ!」

しゅたん

完璧超人達が地上に着地した。

ボフォボフォ ジヤジヤジヤ ニヤガニヤガ キュアキュア

「ニヤガニヤガ、まずは自己紹介させて頂きましょう」

黒装束の男がリモコンのスイッチを押すと、会場のモニターに完璧超人の顔と名前が表示された。各々の超人の名前は、ネメシス、グリムリパー、ジャックチー、ポーラマン、マーベラスであった。

「新世代超人共よ、そんなに俺の顔が気になるか？」

ネメシスが新世代超人の反応を見て、自ら話した。

ミートがそれに応対する。

「あなたは一体何者なんですか？ 見たところキン肉族らしき姿ですが……」

「その答えを知っている者はもうこの世にいないだろうな……今は亡きキン肉タツノリであれば話しただろうが……」

「えっ？ タツノリ様!？」

「さて、色々とすつきりさせておきたい事はあるが、ストロング・ザ・武道の正体が超人閻魔様とは……いったいどういうことか……」

「ニヤガニヤガ、それはひとまずおいておきましょう。優先順位一位はまず敗北者への粛清からでしょう」

しゅっ がしゅっ

グリムリパーが瞬時に移動し、ピークアブーを羽交い締めにした。

「うわっ!」

「ピークアブーさん、潔く自害しましょう」

「いいや！ 俺は新しい完璧超人のあり方を知った、いや、教えて貰った!! 俺達完璧超人の未来のためにも、ここで死ぬわけにはいかない!!」

「ふん、惑わされおって。よかろう、このネメシスが直々に粛清してやる!」

「望むところだ!」

新世代超人達もこの事態を黙って見ているわけにはいかなかった。

「やめろピークアブー! 俺様の関節技を食らいまくった後で闘えるわけがないだろ!」

「そうだ！　ここはヘラクレスファクトリーN.O. 1のガゼルマン様に任せるんだ！」

「どっちみち俺は粛清される！　ならばせめてもの抵抗をするんだ！！」

ネメシスとピークアブーが組み合った。ピークアブーはネメシスを抱えて空中に飛び、技をかけた。

「トーチャスラッシュュ！！」

「ほう、下等超人の技にしてはなかなか良い技だ。だが！」
がっ

ネメシスがいつも簡単に技をはずした。

「手負いの貴様では技の完成度が落ちるわ！！」

がしい

ネメシスがピークアブーに技をしかけた。

「マッスルスパーク！！」

新世代超人達はその技を見て驚いた。

「あれは！　キン肉族三大奥義の一つマッスルスパーク!?」

「あの技は危ない！　万太郎が過去の世界で練習していたから分かりますー！」

チエックメイトがすぐに飛び出した。

「だ、だめだ、抜けられない!!」

ピークアブーが絶望の表情を浮かべた。

「くらえええ!!」

ネメシスがマッスルスパークでリングに落下してきた。

ずがあああん

「ちいつ、余計真似を！」

チエックメイトが下敷きとなり、マッスルスパークの威力を最小限に抑えていた。

「ぐはあっ！」

「ぐほおっ！」

チエックメイト、ピークアブーが血反吐を吐いて倒れた。

「技の威力は半減したが、それでもこの技には十分な殺傷力がある。

これでしばらくは動けまい」

「もう見てられないぜ！」

「俺もいくぜ！」

ガゼルマンとヒカルドが颯爽と飛び出した。

「ボフォボフォ、邪魔はさせんぞ」

ガゼルマン、ヒカルドの前にポーラマンが立ちはだかった。

「ポーラネイル!!」

ぎくう　ぎくう

ガゼルマンとヒカルドの胸板に大きな傷ができた。

「ぐわあっ！」

ガゼルマンとヒカルドが倒れ、戦闘不能状態となった。

「これで邪魔者はいなくなっただか」

ぬわあ

突如リングのマットから人型の物体が複数現れ、ピークアプー、チエックメイト、ガゼルマン、ヒカルドをリングの外へ放り投げた。

「トクトトト、怪我人を苛めても面白くないぜ！　ボーンコールドもフオークザジャイアントも苦戦していたが、俺は先程の試合で余裕で勝ってしまったからな。次戦も相手をしてやろう！」

「待った！　お前だけにこの場は任せないぜ!!」

会場のゲートより四人組の男達が現れた。

「dmpを滅ぼした奴らに借りは返さねえとな！」

「新世代超人にわす達もいるだよ！」

「テキサスのファイティングスピリットが燃え上がるぜ！」

「俺達の仲間をいたぶった奴は許しちやあおけねえな！」

現れたのはスカーフェイス、セイウチン、テリーザキッド、ジエイドだった。

「現時刻をもって俺達も正義超人軍として参戦させてもらおう!!」

『あ———っ！　療養中の新世代超人達がついに復活したああああ
!!!』

神のお告げに導かれて!!の巻

ガゼルマン、チェツクメイトが四人の姿を見て安堵した。

「ようやく復活してくれたか……」

「待っていましたよ……」

セイウチンが倒れてる三人の元に駆け寄ってきた。

「三人とも、よく踏ん張ってくれただ。それに、ノーリスペクト三人衆にも礼を言わなきゃならねえ」

セイウチンが優しく三人に接しているのに対し、他の三人は闘志むき出しの目つきで完璧超人達を見ている。特にスカーフェイスがネメシスに対する視線が強かった。

「ほう、久しい顔もいるな」

ネメシスがスカーフェイスを見ながら言った。

「スカーフェイス、知り合いか？」

キッドがスカーフェイスに尋ねた。

「ああ、あいつにはでかい借りがある。皆知つての通り、真にdmpを滅ぼしたのはあいつらだ。俺もあの騒動の時にせめてきた完璧超人達を何人が倒し力尽きていた。そこに、あの男、ネメシスがやってきたんだ。俺はその時初めて死を覚悟した。やつは桁外れに強い、殺されるってな……」

「お、お前ほどの男がそこまで言うとは……」

ジエイドがスカーフェイスの発言に驚いていた。

「でもな、あいつは俺を見てにやりと笑ってその場を立ち去って行きやがったんだ!! すぐに殺せたというのにな!!」

「そう、貴様をわざと活かしてやったのだ」

ネメシスがスカーフェイスに反応した。

「その答えを知りたくば、俺と勝負するが良い」

「はいはい一端ストップ」

グリムリパーが間に入った。

「続きはリングで行きましょう」

グリムリパーがモニターをチャンネルで操作すると、鳥取砂丘が映

り、突如ピラミッド型のリングが出現した。

「私達はあそこで皆様の挑戦をお待ちしております。もちろん、観客席もたくさん用意しておりますので、お時間のある方々はお友達を呼んでぜひいらしてください。それではしばしのさようなら」

そう言うと、完璧超人達はどこかへと瞬時に飛んでいった。

「よし、俺達もいくぞ!!」

キッドがそう言って空を飛んでいき、続いてジェイド、スカーフェイス、セイウチン、ハンゾウが続いていく。五人がしばらく空を飛んでいくと鳥取砂丘のピラミッドリングへと到着した。

「おっ、扉が5つあるだよ」

セイウチンが指さした先には5つの扉があった。

「その扉は俺達の待つリングへと続く扉だ!! 死ぬ覚悟があれば扉を開いてすすむがいい!!」

ネメシスが大きな声で五人に説明した。

「ちっ、あいつだけは他の奴にはわたさねえ!!」

スカーフェイスが先に扉へと入っていった。

「全く、一人で暴走するのはタッグの時から変わんねえなあいつも、大丈夫か?」

ジェイドが呆れながらも扉に入っていた。

「ト〜トトト! 俺は正義超人と一緒に合わせる気はねえ! さっさといかせて貰うぜ!」

続いてハンゾウが扉に入った。

「ネプチューンマン……荒っぽいやり方だったけど、おらはあんたに恩を感じている。だからこそ、この試合は負けられない!!」

セイウチンが扉に入っていた。

「俺が過去の世界で、皮剥けたところを皆に見せ付けてやるぜ!!」

キッドが扉へと入っていった。

五人が走って行き、最初にリングについたのはスカーフェイスだった。

「待っていたぞ!」

ばしいん

ネメシスが不意打ちのレッグラリアートをくらわせに行ったが、スカーフェイスは上手く腕で防御した。

「俺も会いたかったぜ!!」

『どうやら最上階5階の試合はスカーフェイスVSネメシスになったようです!! これはdmpの因縁対決となりそうです!!』

次にジェイドが四階のリングへとたどり着いた。

「ニヤガニヤガ、私に殺されに来たのは、伝説超人ブロッケンJrのお弟子さんですか」

「こいつ、今までの敵に比べてなかなか手強そうだぜ……」

ジェイドはグリムリパーの得体の知れない強さを感じ取っていた。

『四階のリングはジェイドVSグリムリパーに決定しました!!』

続いてハンゾウが三階のリングへとたどり着いた。

「下等超人が正面から堂々とくるとは、攻撃して下さいと言っているようなものだ」

ジャックチーが熱いお湯をハンゾウに向かって放った。

「むっ!?!」

しかし、ハンゾウではなく、そこには丸太があった。

「トトトト!!」

スパア

ハンゾウがジャックチーを背後から妖腕刀で斬った。

「ぐっ! 下等超人め! 楽に死ぬると思うなよ!!」

ハンゾウは少し息が荒い様子を見せた。

『三階はハンゾウVSジャックチーに決定しました!!』

続いて、セイウチンが二階のリングへとたどり着いた。

「ボツフォボツフォ、貴様が相手とはこれも運命か。遠目で見ていたがまさかセイウチ一族の者だったとはな……」

「??」

セイウチンがわからない表情をしている。

『二階のリングはセイウチンVSポーラマンで決定しました!! そし
て残るはただ一つ!!』

一階のリングにキッドが到着した。

「キュワ〜!!」

マーベラスが不意打ちの跳び蹴りをかますが、キッドも負けじと蹴りを放ち相打ちとなる。

『二階のリングはテリー・ザ・キッドVSマーベラスとなりました!!
これで全リングの試合が決定しました!! 新世代超人と完璧超人の
生き残りをかけた試合がはじまりました——っ!!』

場所は変わり、都内にある超人の博物館に五人の超人がいた。五人の顔や服装ははつきりと確認できない。

「久々だな皆、五人とも邪悪神の力で若返ったようだな……」
「皆、邪悪神に話をされてきたようだな……」

「ああ、あいつらの真意はかつて行われたキン肉マンの王位争奪戦で失脚した神の座を取り戻すために、完璧超人達の騒ぎに乗じて、神に準ずるあの男を倒すこと……」

「まあそんなことは俺達にはどうでもいいことだ。ここに集まった各々が神のためでなく、闘わなければいけない理由があつて来たのだから……」

「そうとも、決して神にそそのかされたわけじゃない!」

「神のお告げだ!」

「完璧超人の誇りなんてもの奪い取ってしまおうか!」

「生まれ変わった我が友のために……」

「あの男の恩に報いるために……」

「あいつの息子の未来を守るために……」

「捲土重来のために……」

「茨の道を進もうか……」

五人は、五王子のマスクをそれぞれ取りかぶっていった。

「いくぞ!! 完璧超人の本拠地超人墓場へ!!」

そこにはかつての五王子達の姿があった。

プロット案

今後の展開をどうするかは考えておりますが、リアルが忙しくてどうにもならない状態です。むしろ他の人が続きを執筆してくれと言う状態であります。

今後はこんな展開を考えています。

・スカーフェイスVSネメシス

この小説ではdmp時代に完璧超人達が悪行超人を殲滅した設定しています。スカーフェイスに関してはその時にネメシスと対峙していて、因縁があつたという話を考えています。

勝敗に関してはネメシスの勝ちにしますが、スカーフェイスの二世における噛ませ犬っぷりが酷すぎるので、大善戦する内容にはしたいです。バスター合戦なんかもやってみたいですね。

後々、ケビンマスクに吊い合戦をやってもらう展開も考えています
・キッド、ジェイド

お二方にもまともな勝利を与えようかなと思えますが、誰を当てるまでは考えていませんね。ジャックチー、マーベラスあたりでもきつそうなので、上手く勝てる展開を考えたいです。また、キッドのキャラだとジャステイスマン自らに喧嘩を売りそうな感じはあるので、原作オマージュで対決はありうるかもしれない(九割9分ほどの確率で死にそうですが)

・ニンジャ復活

作中ハンゾウが意味深なセリフを言っていました。ニンジャのお言葉です。ハンゾウの次なる戦いはKO寸前まで持ち込まれますが、ニンジャがハンゾウの肉体を利用して復活し助ける展開を考えています。

・カオスの参戦

大分反則な展開ですが、流石に始祖達を倒す勢力ももう少し欲しいと思うので。間隙の救世主として危機を救った後の更に成長したカオスがミート君のようにブリザードカプセルで、肉体を若いまま保存していた設定にします。

・ウォーズマンの参戦

同じく戦力強化のために。今作では始祖を倒すぐらいの活躍はさせたいですね。

・原作サイコマンの今後

一応新世代側につきます。万太郎達に「貴方方が不甲斐なさすぎてあきれますが」とか愚痴りながらも、自身を倒したシルバーマンの意思を尊重して闘うことになります。

・万太郎、ケビンマスクの参戦タイミング

二人は一番重傷の状態なので回復がかなり遅れています。参戦は原作で言うところとガンマン・サイコマン・ネメシス・ジャスティスマン・ストロングザ武道が残ったタイミングとなります。万太郎に関してはそろそろ成長リセットなどといわれたいような性格にはしたいですね。

・原作と違う設定？

二世と原作はパラレルワールドとします。なので、この世界ではゴルドマンもシルバーマンと同じく正義超人の開祖者であり、悪魔超人の開祖者はサタン様とします。こうすればつじつまが合うので(笑) ちなみに二世の世界のサイコマンにはガンマンさんが消えるようにダンベルの祭壇に細工をします。原作連載時は散々黒幕と言われていたので(笑) なお、すぐにストロングザ武道に制裁されます。

こんな感じで展開考えていますが、風呂敷を広げすぎな展開にありそうで、書いても収束できるのか?と思いますね(汗)

09 / 16 追記

・運命の五王子参戦

どうせならフェニックスやアタル兄さんが完璧超人始祖に挑んだ方が、一読者としても見ても、やべえめっちゃテンション高くなるわ!! となります。ちなみに五王子が完璧超人達に挑む同人誌を見ましたが、原作愛に溢れていますので是非見て頂きたい。

さて、参戦理由の作り方で困りますが、以下の設定だけは思いつき

ました。

邪悪の神：元神であるザ・マンが暴れているから、昔超人界を騒がせたお前らが償いとして何とかしろ。

五王子に関しては

フェニックス：キン肉マンの息子である万太郎を守るために闘う

ビッグボデイ：原作同様、汚名返上のため

マリポーサ：ロビンマスクの息子ケビンマスクを守るために闘う

ゼブラ：友であるキッドを殺した贖罪として闘う

そして最新作でもハブられたソルジャーマンにチャンスを与えたいですね。そうなるとアタル兄さんの使いどころですが。

・ゴールドマン、シルバーマン参戦

参戦方法についてはですが、両者は旧原作同様闘う身体が欲しい状況となつていることにします。

ゴールドマンマスクに関してはアタル兄さんにかぶってもらうことにいたします。将軍様とアタル兄さんも相性はよく喧嘩しつつも気の合うイメージですね。

シルバーマンに関してはサイコマンにかぶってもらいます。一度原作での闘いを通じた後のサイコマンであれば、未熟な新世代正義超人のために味方はしたくないし、ザ・マンを裏切ることはできない。しかし、ザ・マンにつくようでは結局は変わらない。ならば自分に勝利したシルバーマンさんに身体をお貸ししましょうと考えるかと。それにシルバーマンLOVEなのでむしろ進んでそうしそうな（笑）

奪われた伝家の宝刀!!の巻

カーン!

『さあ! ついに過去の世界より帰ってきた新世代超人が
パーフエクト・ラージナンベラス
完璧・無量大数軍と激突だ——つ!! 過去の世界ではロビ
ンマスクとタツグを組んだキッド! 完璧超人マールベラス相手に
いかなる試合を見せてくれるか注目です!』
「俺の力を見せてやるぜ!」

ブン ブン ブン

テリー・ザ・キッドが開始早々フツクを振り回していく。それを
マールベラスは軽々と避ける。

『先手を仕掛けたのはキッド! 物凄い攻撃だ! 父テリーマンばり
のナツクルパート! しかしマールベラス軽々と見切っているぞ!』

「伝説超人テリーマンの息子と聞いて期待したが」

ドゴオ

『あ——つ! マールベラスの突き出した右の掌底がキッドの
顔面をとらえた——つ!!』

「ぐう!」

「これではスパリングにもならんな」

ガゴオ

「マールベラス! 追撃で左の前蹴りをテリー・ザ・キッドの顔面にくら
わした——つ!!」

テリー・ザ・キッドは後ろによろめくが、踏ん張ってダウンを防い
だ。

「これならどうだ——つ!!」

『キッド! マールベラスに向かってシオルダータツクルだ!』

「キュワキュワ、単純な動きだな」

マールベラスがキッドの足下に視線を向けた。

シユタン

『キッド! シオルダータツクルの体勢から飛び上がった!』

マーベラスは瞬時に体を前転させる。
ガゴン

マーベラスは飛び上がったキツドの左膝に自身の体重を乗せた右のかかとをおみまいした。

「ぐああああ!!」

キツドは苦痛の悲鳴をあげ、左膝をおさえながらリングのマットに転げる

『これは凄い！ マーベラス！ キツドのシヨルダータックルのフェイントからの飛び膝蹴りを読んで、胴回し回転蹴りをキツドの膝に喰らわせた!』

「下等超人ごときのこそくなフェイント技など容易に読める。お前は私にかすり傷一つすら与えられずに敗北するのだ」

「舐めやがって!」

キツドは右膝の痛みに耐えながら立ち上がった。

「立ち上がると痛からう! すぐに寝させてやろう!」

マーベラスが右のローキックで、テリー・ザ・キツドの左膝を狙った。

がしい

キツドはマーベラスの右脚をタイミングよく左手でキャッチした。

『お———っ! キツド! マーベラスのローキックを読んでいたかのように左手でとらえた!』

ゴロン

キツドはマーベラスの右脚をとって、バランスを崩しリングに寝させ、すかさずスピニングトゥーホールドの体勢に入った。

グギイン

「ぐうう!!」

マーベラスにキツドの技が効いている。

『出た———っ!! テリー一族伝家の宝刀スピニングトゥーホールドだ———っ!! ここまで劣勢のキツドでしたが、ようやく反撃に出ました———っ!!』

「過去の世界でロビンマスクが教えてくれたのさ。ウィークポイント

は相手に狙われる弱点であると同時に、相手の動きを確定させる要素でもあるんだってな」

「なるほど、完璧超人である俺ならそこを攻めると予測したわけか」
「さて、技の動きを容易に読めるとか、かすり傷すら与えられないといったのはどこのどいつかな？」

テリー・ザ・キッドがマーベラスを煽る。

「キュワキュワ、俺を怒らせるとはな！ ここからは手加減できんぞ！！ ライジングドラゴン！！」

マーベラスの両肩の龍が動き出し、キッドに襲い掛かった。
がぶう

「うおっ！」

『あ———っ！ マーベラスの両肩の龍がキッドの両腕に噛み付いた———っ！！』

「キュワ！」

マーベラスはキッドにできたスキを見逃さずにスピニングトウーホールドから脱出した。

「お前の親父の時代では通じたかもしれんが、このマーベラスにそんな古臭い技が通用すると思うな！」

『さらにマーベラスの両肩の龍がキッドの腕を交差させたまま、つるし上げ、なにやら固め技に入ったぞ！！』

「双龍・トグロ固め———っ！！」

グキ グキ

『マーベラスの両肩の龍を利用した拷問ストレッチ技でキッドの背骨が軋む———っ！！』

「ぐああっ！！」

テリー・ザ・キッドが苦痛の悲鳴をあげた。

「よほどお前の血は旨いと見えて、紅龍と蒼龍が喜んでおるわくくくくっっ！」

「くっくっく………」

テリー・ザ・キッドが笑い始めた。

「どうした？ 出血多量で頭がおかしくなったか？」

「な〜に、昔俺が対戦したレックスキングの噛みつきに比べたら、全然弱い噛みつきで安心しちまったのよ!」

ガギヤ

『キッド! 両の腕を強引に外した!』

「どおりやあ!」

ずがあん

『キッド! さらに足腰の力だけでマーベラスの身体を浮かせ、脳天をマットに叩き付けた——つ!』

「ぐう!」

「まだまだ!」

ぎゅーん

『キッド! マーベラスを抱えて上空へ高くジャンプ!』

その様子をネメシスと闘っているスカーフエイスが考察した。

「俺と闘った時は身体も出来上がっていないところもあってパワー負けしているところがあつたが、ロビンマスクとタッグを組み始めたあたりから第二の成長期が来て、身体もできあがりパワーもついてきたようだ。昔のキッドなら力不足で脱出できなかった技も何とか抜けられるようになったみてえだな」

テリー・ザ・キッドは空中でマーベラスの後頭部に両手をそえつつ右膝を載せた。

「カーフブランディング!!」

『出た——つ!! テリーマンが得意としていたカーフブランディングだ——つ!! これで勝負あつたか——つ!!』

びきん

その時、テリー・ザ・キッドの右膝に激痛が走った。

「ぐわっ!」

「キュワキュワ、どうした? 技のかけが浅いぞ?」

ぐいっ

『あ——つ! 技のかけが甘くなつたところを狙われた! マーベラスがカーフブランディングから脱出!!』

「そういえばうちのネメシスと闘っているスカーフェイスがお前の技の改良版を使っていたようだな。しかし、このマーベラス様にかかればより強い改良版が可能となる」

ガキイ ガキイ

『マーベラス！ 両膝をキツドの後頭部にのせて両の手をそえる！
更に両肩の龍でキツドの両腕を固定するように噛みついた！』

その様子をスカーフェイスが見て驚いた。

「あ、あの技は!?!」

「これがカーフブランディングの完成形！ マーベラスブランディング
グ!!」

ずがああん

『決まった————つ!! マーベラスブランディングによって
キツドの脳天がマットに強烈に叩き付けられた————つ!!

スカーフェイスが編み出したバッファローブランディングに比べ、こ
ちらは双龍を駆使した分、より威力の高いものとなった————

——つ!』

米英同盟の証!!の巻

マーベラスが技を解いたが、キッドは起き上がらない。マーベラスは勝利を確信した。

「あつけなかったな。お前はテキサスの暴れ馬という異名を持つようだが、テキサスの仔馬に名前を変えたらどうだ？」

「ふ……ふざけた事言ってるじゃねえぞ……」

『あ———っ！ キッドが満身創痍ながらも立ち上がってきた———っ！』

「馬鹿な！ あれで立ち上がれるなんて！」

「お前は俺がテキサスの暴れ馬の異名を持つとか言っていたが……」

テリー・ザ・キッドがスカーフェイスに指を指す。

「今お前の仲間と闘っているスカーフェイス、あいつに異名を奪われたままなんだよ……」

スカーフェイスが自分の名前が出てきて反応を示す。

「いつの日かパパの異名を奪え返す……あいつよりも強い男になるために……ここで倒れてられねえんだ！」

「あいつめ……」

スカーフェイスがキッドに笑みを送る。

「キュワキュワ、なるほどな！ ならばお前に最高の試練を与えてやろう！ ライジングドラゴン！」

がぶ がぶ

『キッドの両脚に双龍が噛み付いた———っ!!』

「〈完昇〉 双龍同体飛燕———っ！」

『双龍がキッドの身体に回転を加えて上昇させた———っ!!
マーベラスが宙に飛ばされたキッドを追ってジャンプ！』

「キュワキュワ、これでとどめをさそう！」

がきい がきい

その技を見てスカーフェイスが驚いた。

「なっ！ あの技は?！」

その技はほとんどアルティメット・スカー・バスターに近い形態の

ものだった。ただ、両腕を双龍に噛み付かれて、より脱出の困難なものとなってている

『これは！ スカーフェイスの必殺技アルティメット・スカー・バスターを越えるバスター技だ——っ!!』

「アルティメット・マーベラス・バスター!!」
『キッド大ピンチ！ この技を脱出できなければ死ぬ可能性は高い!!』

テリー・ザ・キッドは朦朧とした意識の仲で考えた。

（どうする？ キン肉バスターの攻略方法は以前スカーフェイスが示したが、その一つである首からのエスケープはできない。かといって俺には6を9にひっくり返す程のパワーもない。ロビンマスク、あんなならこんな時どうしたんだ……）

時は過去の世界へ旅立った時へ戻る。ロビンマスクがテリー・ザ・キッドに大事な話をしている。

（キッドよ、お前も薄々感じているかとは思うが、私達では時間超人達には勝てない）

（ロビン！ あんたらしくねえぞ！ そりゃあライトニングもサンダーも強いが……ケビンマスクを助けたくはないのか！）

（話を最後まで聞いてくれ。恐らく私達よりもキン肉マン、テリーマンの二人が闘った方が勝率は高い。そして、お前の仲間であるキン肉マンの息子を名乗る男もしかしたら……。だから私は未来のお前に託すことにした）

（未来の俺？）

（短期間の付き合いではあるが、お前の胸に眠る正義の魂、そしてテリーマン以上の超人になるポテンシャルを、私は理解し、信じた。だから大会期間中、お前に私の全てを授けられるように鍛えよう。今後、未来の世界に時間超人以上の敵が現れても対処できるように）
（いいのかロビン？ 本当に自身の手でケビンマスクを助けなくてもいいのか？ それにもしてお前の意向がばれたら総スカンものぞぞ）

（私の個々の意志や評判よりも、未来の正義超人界が優先だ。お前は

気にせず私の強さを引き継いでくれ)

テリー・ザ・キッドは強い意志を持った顔で頷いた。

「俺は改めて思い出したぜ……」

ぼわあ

『あ——っ！ キッドの身体が金色に発光した——
——っ!!』

「今更どうあがこうが、無駄だ!!」

「見てろよスカーフェイス！ これがテキサス流のバスター返しだ——
——っ!!」

ぐいん

テリー・ザ・キッドは足腰に全力をこめて前方にふった

「なっ、体勢が!？」

両者の体勢は180度反転し、テリー・ザ・キッドがキン肉バスターをかける体勢となった。

『あ——っ！キッド！ アルティメット・マーベラス・バスターを前後方向にひっくり返し、バスター返しを繰り返した——
——っ!』

テリー・ザ・キッドはロビンマスクに過去に言われた言葉を思い出した。

(自分の父親を素直に受け止めよ。テリーマンであることを拒否せず
に、テリーマン以上のテリーマンになるんだ)

「そう！ 俺のパパだったら足腰の強さを活かしてこんな感じで脱出した
ただろうな——っ!!」

ずがああん

「テキサスバスター返し!」

「キュワガハア!」

マーベラスが血反吐を吐いた。

『キッド！ まさかまさかのアルティメット・マーベラス・バスターを

返し逆転の技を繰り出した——つ!!』

「まだ終わっちゃいないぜ!」

キッドがキン肉バスターの体勢を保ちながら、リングロープに登り、リングロープの弾性を利用したジャンプをしながら、マーベラスを空中に回転させて宙に放った。

ゴワツ ゴワツ ゴワツ

「テキサス流アイス・ロック・ジャイロ——ツ!!」

『なんだこの技は——つ!? マーベラスの身体が宙で凄まじいスピードと回転で飛び回り身体が凍り付いていくぞ——つ!!』

「キユワ〜ツ! 動けん!!」

「この技を持ってテキサスの暴れ馬を取り戻す!!」
がしい

『キッド! 凍り付いたマーベラスの後頭部に両膝を載せ、さらに両手を双龍に押し付けてそのままマットに落下だ——ツ!!』

「トリプルブランディング——ツ!!」

ずがあああん ばりいいん

『決まったあ! マーベラスと双龍の頭、計三つの頭を一気に仕留めた荒技だ——つ!!』

マーベラスを覆う氷は割れたが、失神していたようだった。

カン カン カン カン

「わああああああ!!」

キッドの勝利を告げるゴングの音色に観客は盛り上がった。スカーフェイスも嬉しそうな顔をしている。

『やりましたキッド! もはや駄目かと思われましたが、怒濤の反撃技で奇跡的逆転勝利をつかんだ——つ!!』

その様子をロビンマスクも遠くからモニターで観戦していた。

「やったな、盟友よ」

ずきん

「ぐっ!」

両手をかかげて高らかに勝利をアピールしていたテリー・ザ・キッドが右膝をおさえてうづくまつた。

さらに失神していたマーベラスが意識を戻した。

「キュウキュウ、まさか下等超人に敗北するとはな……忠告しておく、お前が闘いを継続するのであれば、おれ以上の敵と闘わなければならぬ……その脚を完治しなければ善戦すらできないだろう……」

「ユーの忠告、しかと聞かせて貰ったぜ」

「感謝する……生き残れよ、テキサスの荒馬……」

そこまで聞いてテリー・ザ・キッドがはっと気付いた。

「待て！ ガゼルマンやチェックメイトにお前達を救うように託されているんだ！」

しかしテリー・ザ・キッドは脚の痛みで思うように動けない。

「脚を痛めずに勝つぐらい強くなりな……でないと俺達の自害は止められないぜ……ライジングドラゴン！」

蒼龍がマーベラスの胸をえぐり、心臓を引きちぎった。

「がはあっ！」

マーベラスは血反吐を吐き、すぐに息絶えた。

「マーベラス！」

だああん

テリー・ザ・キッドを両手をマットに強く叩き付け、完璧超人を救えなかった悔しさを表した。

北極野生獣達の激突!!の巻

? 『ここ二階リングではセイウチンVSポーラマンの氷点下野獣対決が行われております!! 両者獣超人として迫力ある試合を見せてくれることでしょう!!』

「うおおお!!」

はじめにしかけたのはセイウチンからであった。

『おおー、これは珍しい!! スロースターターのセイウチンが先手をしかけた!!』

「ボフォボフォ! 下等超人の力を見てやろうか!」

がしい

セイウチンとポーラマンは互いに両手を合わせての力比べに入っ
た。

『両者まずは組み合つての力比べだ!! おお! セイウチン!! 体格差がありながらもそれを感じさせないパワーだをみせつける!!』

両者パワーが均衡している状態に見えた。

「なるほど、まあまああの怪力ではあるな。しかしな!」

ぐぐぐぐ

ポーラマンが本気を出し、セイウチンが徐々に押されていった。

「この完力ポーラマン様相手に力比べするなんざ無謀がすぎるってもんだ!!」

『ポーラマン! 新世代超人の中でもパワーファイターのセイウチン相手にパワーで圧倒している!!』

「ぬおお!! なんとという力だ!!」

セイウチンも懸命に負けじと力を出す、力負けしてしまっている。

「これが完璧超人と下等超人の力の差だ!!」

がああん

ポーラマンは組み合いの状態からセイウチンに頭突きをくらわせた。

『ポーラマン! 強烈な頭突きをセイウチンにお見舞いだ!!』

「ぐわあ!!」

セイウチンは頭部から流血しながらよろめいた。

「弱肉強食の世界をその身に教え込んでやるぜ!! ポーラネイル!!」
ざくり

ポーラマンは自身の爪でセイウチンをひつかき、セイウチンの胴体に巨大な四本線の傷をつくった。

『ポーラマンのパワフルな頭突き、そして鋭いひつかきにより、セイウチン早くも大量流血状態だ——っ!!』

「なんの!!」

ばしいん

セイウチンは負けじとポーラマンの右脇腹に左のミドルキックを放った。

『セイウチン! 負けじと重さの載った左のミドルキックを放った!!』

ポーラマンは平然とした顔をしている。

「ほう、そこそこの蹴りだな。だがな」

どごおお

ポーラマンはセイウチンに重さの載った右の平手打ちをかました。

「ぐほおー」

セイウチンがふつとばされ、マットに倒れた。

『ポーラマン! セイウチン以上に重さの載った打撃を返した! セイウチンついにダウンだ!!』

「なんとも手応えのないもんだ。かつて完璧超人だったネプチューンマンが見込んだ奴だからどんなものかと期待したが、ネプチューンマン、とんだお眼鏡違いだったようだな」

「ま、まだまだ! わ、わすはまだ倒れるわけにはいかない!」

『セイウチン立ち上がった! まだ闘志は消えておりません!』

ポーラマンがセイウチンの顔を見て何かを思い出した様子を見せた。

「ほう、見れば見れるほどあいつにそっくりだ」

「一体、なんのことだ?」

セイウチンがポーラマンの言葉に疑問に思った。

「ところで、お前の親父は既に無くなっているか？」

「ああ、漁に出ている時に嵐で亡くなったとおがぁから聞いただ」

「ボフォボフォ、どうやら本当の死因は聞かされていなかったようだなあ」

「なに、それはどういうことだ？」

「順を追って説明してやろう、かつてお前の一族であるセイウチ一族とそして俺のポーラ一族との間で争いがあつた。理由は当時の北極は餌が極端に少ない状態で、より自分の一族の領地を広げようとやっきしていたからだ」

「そ、そんな話は初めて聞くだ……」

「結果的にその争いはセイウチ一族が勝ち、俺達ポーラ一族は隅っこに追いやられた。いつしか人間共まで白熊はセイウチを恐れるとか言われるようになってしまったのだ」

「本当の話か？ 信じられねえだ……」

「お前の態度を見る限り、セイウチ一族は都合の悪い話を若い世代にはふうじてきたようだな。まあいい、俺も当時あの争いに参加していたのだ。その時に俺が殺した男がいる」

セイウチンはイヤな予感がした。

「ま、まさかその男とは!？」

「そうだ……お前の親父を殺したのはこの俺だ！」

『なんと！ ポーラマンの口からとんでもない歴史が明らかにされた

——つ!!』

「そんな！ いや、なんでおがぁは黙っていたんだ!! 争いがあつたこと、そしておどおが殺されたことを!!」

鳥取砂丘の会場の特設の応援席でセイウチンのおがぁと妹のドロシーがその様子を見ていた。

「いつか言おうと思っていただ……あの頃は皆おかしかったんだ……当時自分達の生活がかかっていたとはいえ、一族の皆が勝つたためにどんな努力も惜しまなかった……しかしセイちゃんやドロシーが聞い

たらさぞかしショックを受けるだろうと今日まで黙っていただ……」
「……」

セイウチンはショックで何も言葉を発せなかった。

「ボフォボフォ、当時お前の父親と一戦交えたが、一見優男に見えるながらも、戦闘になると凶暴になり、まさに野獣そのものだった。俺が今ほど強くなかったのもあるが、当時大苦戦の末に奴に勝ったぐらいだ。まあ当時一族最強の俺がしばらく闘えない状態になったために、ポーラ一族は争いに敗北してしまっただがな」

「お、おらのおどおがそんな人だったのか……過去の世界のおどおはあんなに優しかったのに……」

「それに比べお前はひ弱ひ弱、親父がこの試合を見ていたらさぞ嘆いていることだろうよ」

「だ、黙るだ!! おどおはそんな奴じゃねえ! それに人様の親を馬鹿にする事はタブーだと、おめえは親から教わらなかったのか!!」

しゅたん

セイウチンがジャンプし、ポーラマンに蹴りを放った。

ぼふん

ポーラマンはセイウチンの蹴りを難なく右手で受け止めた。セイウチンは自身の蹴りの威力を和らげられたかのような感触を感じた。「動物の肉球というものは保護のためについている。俺の肉球はいかなる打撃をも半減させる弾力を持っているのだ!!」

がしい

ポーラマンが右手のみでセイウチンの体を持ち上げ、マットにたたきつけた。

がああん

「ぐはあ!!」

セイウチンはまたもダウンした。

『セイウチン! 攻撃が全く通用しません! ポーラマン恐ろしい強さです!!』

「当たり前だ、ポーラマンは俺が唯一認めた盟友、下等超人相手に負けるわけが無かろう!」

ネメシスはスカーフェイスと交戦中ながらも余裕のコメントをかましている。

「お前、過去の世界ではネプチューンマンと一緒に親父顔負けの野獣として暴れまくったんだろう？　しかも野獣の気持ちもなくしたら今のように滅法弱くなり、敗北した。雑魚を狩っても面白くねえ、野獣としてのお前の姿を見せな!!」

「だ、駄目だ……お前は正義超人として闘うんだ……あの過ちを二度犯してはならない!」

野獣と化したセイウチンと一戦交えたジェイドがセイウチンを気にしていた。

「セイウチンには勝って欲しい……だが仲間としてあんなセイウチンは二度と見たくない……」

「ほほほ、よそ見をしている余裕はあるのですか?」
がしい

ジェイドと闘っているグリムリパーがジェイドを片手でネックハンキングに持って行った。

「ぐうう、セイウチンすまない、今の俺には何もいえねえ……」

セイウチンは迷いを見せていた。勝つべきか、仲間の絆をとるか、葛藤していた。

「俺は気は長くねえ。その気が無いなら今すぐお前を殺す!」

「お、おらは……おらは……」

「セイウチン!!」

リングに向かってどこからか大きな声が聞こえてきた。その声の主はヒカルドだった。

「ヒカルド!?　急にどうしただ?」

「俺はてめえの正義超人としての姿勢が気に入らねえんだ!　お前は皆にちやほやさされたい、嫌われたくないとかでお利口な正義超人やつてんのか!!」

「違うだ!　おらは人間達を、そしておがあやドロシーを守るために正義超人として闘っているだ!!」

「だったら迷わず野獣になりやがれ!!　俺だったら自分の正義を貫く

ために迷わずその道をゆくぜ！ 見た目が醜くかろうが、凶悪なファイトだろうが、お前が正義超人としての魂を忘れずに勝てば良いだろうが——っ!!」

「ヒカルド……」

「聞け！ セイウチン！」

スカーフェイスもネメシス相手に劣勢ながらもセイウチンにげきを飛ばしてきた。

「てめえがまた本当の野獣になっても、お前が誰かに迷惑かける前に俺が倒してやる!! 安心して野獣になりな!!」

ジェイドがスカーフェイスの言葉を聞いて、表情が明るくなった。

「セイウチン！ お前が野獣になりながらも優しい心を捨てていなかったのは闘った俺がよくわかる！ 安心して全力をだしな!!」

セイウチンは決意した。ヒカルド、スカーフェイス、ジェイドの声に応えると。

「皆ありがとう……おらはもう迷わねえ!!」

むくむく

セイウチンの体の筋肉が発達し、優しい顔が凶悪なものへと化していった。

「そうだ、俺が見たかったのはそれだ！ さあここからが本当の勝負だ!!」

ポーラマンは気合いを入れ直した。

真の覚醒の巻!!

『あ——つと！ セイウチンの雰囲気は野獣のように変わっていった——つ!! これはもしや!! 過去の世界でネプチューンマンによって覚醒したセイウチンの野獣の姿か——つ!!』

「グロロ——ツ!!」

セイウチンが身体を前方方向に回転させながらポーラマンに向かってきた。

「セイウチトウス!!」

ガブウ

「ぐおあつ!!」

ポーラマンが苦痛の声をあげた。

『これは残酷!! セイウチン!! 自身の牙をポーラマンの肩にさした——つ!!』

「ぐつ！ なんの!!」

『ポーラマン両手を使ってセイウチンの牙を強引に引っこ抜き、その流れでコーナーポストへ投げつけた——つ!!』

「グロロ〜!!」

セイウチンは牙をコーナーポストへ引っかけながら自身の身体を上手く回転させて、その勢いでポーラマンにドロップキックをかました。

「ボフォツ!？」

『あ——つと!! さつきとはうってかわって!! セイウチンがポーラマンを圧倒しているぞ——つ!!』

「これでおわりじゃねえだ!!」

『セイウチン!!ポーラマンの左腕を一本背負いでかついで巨体を持ち上げ、勢いよくリングに叩きつけにいった——つ!!』

ずしいいん

「ボツフォボツフォ、なるほど、これが本来の姿のお前ってわけか」

『あ——つと!! ポーラマン!! 平然と起き上がってきた——つ!!』

「これでも受けてみな——つ!!」

どがあ

『ポーラマン!! セイウチンのボディに前蹴りをおもいつきくらわした——っ!!』

「おめえの方こそ、てえしたことねえな!!」

ぼごお

『なんだこれは——っ!! セイウチンの前蹴りを受けた部分が凸状に伸びて、ポーラマンを攻撃した——っ!!』

「ぐおっ！」

「次はこれだ——っ!!」

『セイウチン!! 今度は背中からのボディプレス、スワンダイブだ——っ!!』

「そんな何の変哲も無い技、容易に受け止めてくれるわ!!」

「ひっかつかったな!! ニードルファー!!」

グサグサグサ

「があああ!!」

『セイウチン!! 今度は身体をの毛皮を硬い針状にしてポーラマンを串刺しだ——っ!! ここまで猛攻をくろうと流石のポーラマンも倒れるか——っ!!』

「ボフォボフォ、期待して一通りお前の技を受けてみたが、全然大したことがねえな——っ!!」

『ポーラマン!! セイウチンの身体に刺さったのを強引に引きはがし、セイウチンごと空高く飛んだ——っ!!』

ポーラマンはセイウチンを自身の背中側にかたまってそのまま落下していった。

「くらえ、マツキンリー風!!」

グワアガア

「ぐほあっ!!」

セイウチンは血反吐を吐いて倒れた。

『ポーラマン!! ここまで猛攻を受けてましたがあっさりと逆転してしまいました!!』

ワッソ ツッ スリッ

「ボフォボフォ、これでようやく、ポーラ一族の屈辱の歴史が終わる!!
セイウチ一族との争いで大半の者が殺され、仲間や家族を失った俺
に残されたのは強い自分だけだった!! もう誰も殺させまいと、完璧
超人になった思いは今報われたのだ!!」

「そうか……そういうことだったか……」

エイトく ナイクン

セイウチンがふらふらになりながらも立ち上がった。

『セイウチン!! あれだけ強烈な一撃をくらってもまだ倒れない!!』

「ほう、根性は大したもんだが、大人しく寝ていた方が楽に死ねるぞ
?」

ポーラマンは腕を組んでセイウチンを眺めている

「おらは新世代超人の未来を守ろうと闘っていた……でもそれだけで
はだめだ……おめえを救わなきゃいけねえ……」

「……」

ポーラマンは黙ってセイウチンの話を聞いている。いつしかセイ
ウチンも野獣の顔つきもなくなりいつもの優しい顔へと変化してい
た。

「あんたは長年苦しんできただ……家族や仲間をなくすのは誰だって
悲しいだ……でもこんな口先だけでそれは伝わらねえ」

ボワア

セイウチンの身体が金色に光った。

「話はわかった。ではお前の命で、今後のセイウチ一族の恨み辛みは
一切なしにしてやるわ!!」

『ポーラマン! セイウチンにとどめをさしにいった! セイウチン
を上空に放り投げ、なにやら固め技に決めていった!!』

グワガア

「熊嵐固め!!」

『ポーラマン!! セイウチンを脱出できない体勢に固めて自身ポーラ
ネイルをセイウチンの背中にくいこませた!!』

「楽には死なせねえ!! じわじわと苦しめて殺してやる!!」

「この試合、おらが勝つだ!!」

ムキムキ

セイウチンが肩の筋肉を発達させていく。

「な、なんだこれは!! 先程よりもパワーが違う!? 馬鹿な!! 下等超人が7200万パワーの力を持つ俺の力を跳ね返していく!?!」

ずぼお

『セイウチン!! なんとポーラマンの技から抜けた——っ!!』

「ネプチューンマン、まだおらはおめえにちゃんと礼をしてなかっただな」

セイウチンは左腕をポーラマンの首にひっかけたまま高速でリング内を一周するように高速で駆けていく。

『あ——っ!! セイウチン!! ポーラマンをリアアットの体勢で高速で走る!! リングには竜巻まで出始めた——っ!!』

セイウチンはポーラマンヘリアアットの体勢を崩さないまま竜巻にのつてのぼっていく。

「ぐぐぐ……段々と意識が遠のいていく……」

「そうだろ、リアアットの状態を長時間保ち続けたら、脳に血がいかなくなって、意識が薄れてくるだ。しかし、これでこの技は終わりじゃねえ」

『セイウチン! 空中で何やら技を決めに行った!! ポーラマンの頭を背中から両脚を固定し、両脚を自身の腕で掴み、そのままリングへ落下だ!!』

ガガン

「サーモンスプラッシュ——!!」

ポーラマンは頭を強く叩き付けられ、そのまま意識を失った。

カン カン カン カン

『やりましたセイウチン!! 強豪ポーラマン相手に敗北かと思いましたが、逆転勝利を収めました!!』

「当たり前だ」

超人病院内で観戦していたヒカルドがそう言うと、一緒の部屋にいた新世代超人達がふりむいた。

「ネプチューンマンが言っていたんだ。あいつは根が優しいしポテンシャルも高いから、かつてキン肉マンが得意としていた慈悲の力を使いなせる素質はあったとな。しかし、優しすぎるがゆえに対戦相手に本気を出せないところもあり、過去に旅立つ前の時点でもそれなりの闘いのキャリアはあったが、その悪い癖は治らなかつた。また、対戦相手にも恵まれず、慈悲の力を開花させるきっかけもなかつた。荒っぽいやり方だったが、野獣として覚醒させ相手への手加減をなくすファイトスタイルを確立させた。さらにセイウチンは旧世代超人のウオーズマンと闘うことも出来た。ここまでやればあとは本人次第だとな……」

「そうか、ネプチューンマンの言動があんなにも酷かつたのはそこまで考えていたからじゃったのか……」

バリアフリーマンが納得いつた表情を見せた。イリユーヒン、ガゼルマン、チエツクメイトも納得の顔を見せる。

リングでは倒れているポーラマンへセイウチンが寄り添った。

「ポーラマン、今おめえは自決使用していると思う。でもその前におらの話を聞いて欲しいんだ」

「いいだろう……勝者の権利だ……話ぐらい聞いてやる……」

「ありがとう。確かに先の争いでセイウチ一族とポーラ一族が闘い、セイウチ一族が勝ち、ポーラ一族負けて苦しんだという歴史があるかもしれないねえ。でも、争いに勝ったも負けたもねえ、どっちも被害者なんだ……」

「ひ、被害者？」

「そうとも、ポーラマンも大事な人を多く失ったように、勝った方だって仲間を多く亡くしている。おらだって父ちゃんを亡くしちゃっただ……。だからこそ憎むのではなく、互いに互いを理解して、失った物を取り戻すため、手を取り合う事が大事だと思うんだ……」

「手を取り合う……」

「この闘いが終わったら、おらが残ったポーラ一族達と話をつけにくい。遅くなつたが、復興のために力を貸すと。もちろん互いに対等な立場としてだ」

「ふん……そんなこと、誰が信じるかってんだ？」

「そうだとも、おめえ含め完璧超人がおらたちを下等とみなすのと同様に、どこかで皆、上下を決めちまって対等なんて言葉忘れている。だからこそ、欲しいものがあれば下の奴から奪うという思考に至り、おらたちセイウチ一族もかつて侵略のために争いを起こしたと思うんだ……。といつても、お互い口だけでは分かり合えねえ、だからこそ、今日みたいにおもいきって喧嘩しあうことも大事かもしんねえだ。現にポーラマン、おめえと今日闘えたからこそ、この考えに至れたんだ!!」

「なるほどな……お前の考えは受け入れたいが……もう少し早くな……お前のようなセイウチ一族に会いたかったぜ……」

ポーラマンはよろよろと立ち上がってきた。

「生きるんだポーラマン、おらはおめえと仲良くなりてえ!!」

ひゅん

どこからか雷の形をしたサーベルがリングに降り注いだ。

ばしいん

ポーラマンは咄嗟にセイウチンをリング外にふつとばした。

グサ グサ グサ

ポーラマンにサンダーサーベルが複数本突き刺さった。四階のリングのグリムリパーがサンダーサーベルをポーラマンに飛ばしていたのだ。

「ニヤガニヤガ、ポーラマンさん、容易に自害できない状態のようでしたから」

「ありがたいなグリムリパー……これで、俺も家族のもとへやっといける……」

ばたり

「ポ、ポーラマ——ン!!」

セイウチンが号泣しながらポーラマンのもとへかけよるが既に息絶えていた。